

大学礼拝
説教集

第 22 号



2018

東北学院大学

<表紙の絵について>

ラーハウザー記念東北学院礼拝堂の「キリスト昇天」のステンドグラス…

ヒートン・バトラー&バイン工房一九三二年の制作 4.4×3.5メートル

一九三二年献堂のラーハウザー記念東北学院礼拝堂の正面に設置されたステンドグラスは、キリスト昇天の場面を描く。中央上部に天に向かって上つていくキリスト。それをユダを除いて十一人の弟子たちが立ち会って見上げている。キリストのすぐ下で跪いているのはヨハネである。中央の奥には夕日を背景にするエルサレムが描かれている。キリストの昇天の場所はエルサレムの郊外のオリブ山であるから、エルサレムは真西の方向にある。夕焼け風景はまた初期キリスト教時代では、後の金地の代わりにモザイクの背景に使われ、天国を意味してもいた。昇天はキリストが神であり尚かつ人として、この地上と天国を繋いだことを示す出来事であり、現実世界を神に繋げて意味付ける。

このステンドグラスは、当時のシュネーター院長が、横浜のシングルトン商会を通じて、ロンドンのコヴェントガーデンのヒートン・バトラー&バイン工房 (HEATON BUTLER & BAYNE、以下HBB工房) に注文したものである。このHBB工房は、イギリスのゴシック・リバイバル (十八世紀以来の中世復興の傾向の総称で、その範囲は文学から美術、建築に及ぶ) の指導的工房で、一八五二年にクレメント・ヒートン (Clement Heaton 1824-82) によって始められ、一九五三年まで存続していた工房であった。当学院のステンドグラスは一九三二年製であるから、工房の作品としては、かなり後期の作品ではあるが、密度の高い優品である。

一九三二年の設置以来八十年以上経過し今や、支えていた鉛棧が劣化し、重みによってステンドグラス全体がたわんでいた。東日本大震災の揺れによるひびも少なからず生じている。そもそもステンドグラスは人間の寿命と同じく八十年から百年で修復をしないと崩れてくる。

今回のステンドグラスの修理は、平山健雄氏を代表とする横浜の光ステンド工房に依頼した。まず八月一日に取り外され横浜に運ばれ、七ヶ月後の二月二十七日に再び横浜から仙台の当学院の礼拝堂に運ばれ再設置された。受肉とそれによる神化 (テオシス)、つまり学院の建学の精神の源であるイエス・キリストが我々の現実と日々の営みを支えてくださることを、さらに八十年間、学院の中心である礼拝堂の奥の祭壇部分のステンドグラスが視覚的に教化し続けることになる。

(大学示教主任 鐸木道剛)

大学礼拝

説教集

第 2 2 号

2018

東北学院大学

目次

巻頭言	宗教部長	野村 信	4
放蕩息子・その父、そして兄	理事長・学長	松本 宣郎	7
命は人間を照らす光	院 長	佐々木 哲夫	12
はじめの一步	仙台広瀬河畔教会	望 月 修	18
わたしはなお、神の中にいる	仙台東一番丁教会	瀬 谷 寛	24
遣り直し可能な人生	泉 高 森 教会	阿 部 祐 治	30
心渴く時	仙台東六番丁教会	中 本 純	34
あなたの罪は赦された	石巻山城町教会	関 川 祐 一 郎	40
大いなる自由	東北学院中学校・高等学校 宗 教 主 任	松 井 浩 樹	47
主イエスに導かれて	東北学院榴ヶ岡高等学校 宗 教 主 任	西 間 木 順	54
人生は旅である	宗 教 部 長	野 村 信	59
走り続けること	大学宗教主任	阿 久 戸 義 愛	65
熱情の神	大学宗教主任	北 博	71

クリスマスの喜びはなぜ？

大学宗教主任

鐸木道剛……………75

ターゲット（目標）を外すな！

大学宗教主任

原田浩司……………81

聖書とサイバーパンク

大学宗教主任

藤原佐和子……………85

模範とすべき方

大学宗教主任

吉田新……………91

神の前に豊かになる生き方とは

総合人文学科長

出村みや子……………95

互いに愛するときに

経営学部教授

松村尚彦……………101

誠の命にあずかるために

法学部教授

横田尚昌……………106

主の顕現

工学部准教授

長島慎二……………112

ある日の音楽礼拝

大学オルガニスト

今井奈緒子……………117

人生を変える秘訣

教養学部准教授

大澤史伸……………125

十一月六日（月）音楽礼拝（土樋キャンパス）

宗教音楽研究所
特任准教授

中川郁太郎……………131

Quiet and Thoughtful Worship

大学名誉教授

マーチーデイビッド……………138

まばたきの詩人 水野源三さん

東北学院史資料センター

日野哲……………139

編集後記

大学宗教主任

阿久戸義愛……………145

卷頭言 幸いな出発

宗 教 部 長 野 村 信

8 信仰しんこうによつて、アブラハムは、自分が財産ざいさんとして受け継つぐことになる土地とちに出て行くよ
うに召めし出だされると、これに服従ふくじゆうし、行き先ゆきさきも知らしらずに出発しゅつぱつしたのです。9 信仰しんこうによつて、
アブラハムは他国たこくに宿やどるようにして約束やくそくの地ちに住すみ、同じ約束やくそくされたものを共に受け継つぐ
者ものであるイサク、ヤコブと一緒に幕屋まくやに住すみました。10 アブラハムは、神かみが設計せつけい者しやであり建
設者せつしやである堅固けんこな土台どだいを持もつ都みやこを待望たいぼうしていたからです。

(へブライ人への手紙十一章八節〜十節)

学生の皆さん、そしてこの説教集を読んでくださるすべての人々へ、新しい年度を迎えて、祝
された一年の歩みを送られますように心からお祈りいたします。

まだ白紙の状態の一年を前にして、どのような足跡をつけるか、どのような色のついた一年となるかは、すべての人にとって未知数です。しかし、私たちには想像力という才能が与えられていますから、一年後、こんな自分がいるという青写真、設計図を描き、それに向かって進んでください。一年後には手ごたえのあった、精一杯取り組めた年だったと、振り返られることを期待します。

聖書は、いつも人間の出發を描きます。しかも必ず約束を胸に抱いての出發でした。

アブラハムは未知のカナン地方へ行って住むように神様から命ぜられました。あなたの子孫は「大地の砂粒のごとく」（創世記一三・二六）、「夜空の星のごとく」（一五・五）増えるであろうと約束が与えられました。しかし、アブラハムにはその時点で子供がいませんでした。約束を信じて出發したのです。現在世界の人口の半数がアブラハムを信仰の祖と仰いでいますから、神様の約束は長い歴史を経て実現したことを教えられます。

モーセは、エジプトで奴隷として苦しんでいる同胞の民を連れて故郷カナンの地へ帰るように命ぜられました（出エジプト記三・一〇）。おびただしい数の同胞を連れて帰るには四十年もかかりました。しかし神様の約束通り、この民族はカナンの地で再び豊かな国家を形成することが出来ました。

翻つて、私たちの人生の歩みにおいても同様に青写真を描きましょう。それが神様の祝福の内にある希望なら必ず実現します。結果を見ないで途上で終わろうとも、その歩みは決して無駄には終わりません。なぜなら本当の完成は未来にあるからです。そういうわけで、新たな出発を始めた人々はみな一年後、四年後、そして人生の設計図を描いて、その目標に向かって進んでください。この時のみなさんの幸いな出発を心より願っています。

放蕩息子・その父、そして兄

理事長・学長 松本宣郎

ルカによる福音書 第一五章一一―三二節

11 また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。12 弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。13 何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使いしてしまった。14 何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。15 それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやっつて豚の世話をさせた。16 彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。17 そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。18 ここをたち、父のところに行つて言おう。』お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに

対しても罪を犯しました。19もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にして
ください」と。』20そして、彼はそこをたち、父親のもとに行つた。ところが、まだ遠く
離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄つて首を抱き、接吻した。
21息子は言つた。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯し
ました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』22しかし、父親は僕たちに言つた。『急
いでいちばん良い服を持つて来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履
かせなさい。23それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。24この息子は、
死んでいたのに生き返り、いなくなつていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始め
た。

25ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに來ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてき
た。26そこで、僕の一人を呼んで、これはいつたい何事かと尋ねた。僕は言つた。『弟さん
が歸つて來られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたの
です。』28兄は怒つて家に入ろうとはせず、父親が出て來てなだめた。29しかし、兄は父親
に言つた。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたこと
は一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会するために、子山羊一匹すらくれ

なかったではありませんか。30ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなた
の身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』31すると、父親
は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。
32だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。
祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』

人間は生まれながらにして罪を負っていることを私たちは教えられています。そのことを素直
には受け入れられなくとも、自分自身を見つめるとき、自分の弱さ、愚かさ、他人をねたんだり、
憎んだりする心を持つことを認めざるを得ないのではないのでしょうか。そのような自覚を持つ
人がいるからでしょうか、今お読みした「放蕩息子」の物語はイエスのたとえ話の中でも引用さ
れることが最も多いのではないかと思えます。絵画で描かれることがしばしばですし（たまたま
二〇一八年のキリスト教カレンダーの一枚がムリーリオの「放蕩息子の回心」です）、プロコフィ
エフやドビュッシーなどクラシック音楽のテーマにもなっています。

さて、ここに出てくる父親は大富豪というのではないのですが、堅実な農業経営者のようです。

息子が二人。弟が自由な人生を夢見て、父親に自分が受け継ぐべき財産を前倒しで、今もらいたい、と要請します。いわゆる「生前贈与」です。本来は父が死んではじめてもらえる財産です。ここに「死」の觀念が関わっていることは興味深いところだと思います。

弟は多額の財産を手にして遠く離れた土地に旅立って、おそらくは親たちとは音信不通の状態です。「放蕩」三昧の日々を過ごします。必然的に彼は金を使い果たし、極貧の状況に陥ります。ここでは弟が飢えたことが「死」の状態を暗示していることを指摘したいと思います。

弟はおのれの愚かさ、つまりは罪に気づき、心を入れ替え、父の許に帰ろうと決意します。「息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と告白して赦しを願おう、とまで思い詰めます。

ところが、帰って来た彼を、まだ遠く離れていたのに父は目ざとく見つけ、「走り寄って首を抱き、接吻」するほどに喜んで迎えました。祝宴を命じ、最良の衣服を着せます。その理由を父は、「この息子は、死んでいたのに生き返ったからだ」と明言します。弟の家からの離反は「死」と同義であったことが確認されるのです。

最後に、初めてもう一人の息子である兄が登場し、父の、弟の帰還に注ぐ喜びを、理不尽なことでたと強く抗議します。父と共に生き、働いてきた自分に対する父の接し方と比べて何という不

公平か、と。父は兄の不平、あるいはひがみに対して、弟の死からの生き返りがどんなに大きな喜びであるか、と前の言葉をくりかえして、物語は閉じます。

一見とてもわかりやすい物語のように見えます。もちろんわかりやすく受けとめていいのです。たとえ話ですから、自分のことになぞらえて理解することが求められていると言ってよいでしょう。そしてこの物語を読む者は、まずは「弟」を自分の生き方に重ねて考えるでしょう。神への信仰、そうでなくとも人間として自分が正しい生き方をしてきたか、を振り返って、神、あるいは親の愛情を裏切り、厳しい状況に自ら落ち込んでいった経験に思い当たるかもしれません。その時、この物語の父、あるいは神が、悔い改めれば無条件で喜び祝ってくれる、そのような存在があるのだ、ということに考え及ぶことは自然です。ルカ福音書は、読む者に、人間の罪とそこに気づくなら、その罪は神によつて赦されることを教えます。

それに加えて、繰り返し記しましたように、弟にたとえられる私たち人間が間違つた方向に行つてしまふ、つまりそれは罪を持っているということであり、私たちは「死」に直結する生き方をしている、ということはこの物語は示して見落としてはならないと思います。父の許に帰ろう、神の許に帰ろう、ということは、「死からの生き返り」すなわち「死からの復活」だ、

ということです。キリストの死と復活、が物語の伏線である、ということなのです。

最後に、「兄」です。読者として、「弟」を自分に置き換えて読む人がいる一方、「兄」を「自分」と考えてみてはどうでしょう。まじめに父に背かず生きてきて、不自由はありません。しかし、不満を抱え、家を捨てて勝手な生き方をしたあげく凶々しくもどつて来た弟を大喜びで迎える父に、彼は不満を爆発させます。

私たちは、日頃自分はごく正直に、よい人間として生きていると思い、過った行動を起こす人々を冷ややかに見がちではないでしょうか。散々自分勝手な行動をしたにもかかわらず、大変な幸運に恵まれた人がいたとしたら、なんとなくひがむ気持ちを抱いて、けちをつけたくなったりすることがあるのではないのでしょうか。

この「兄」は、罪とか愚かさの自覚、それを悔い改めること、そのような者を心から喜ぶ父の愛情、を理解できていないのです。

父の心、すなわち神の、罪ある者にそがれる愛、を知り、この父と共に、弟の生き返りを喜ぶ兄になることもまたこのたとえ話から学びたいと思います。

祈り…神さま、放蕩息子の物語から、父なる神が罪人の悔い改めを喜び、死からの復活をも示してくださっていることを知らされ感謝いたします。どうかあなたの愛を信じ、喜んで生きる者として下さい。主の御名によって祈ります。アーメン

命は人間を照らす光

院長 佐々木 哲夫

ヨハネによる福音書 一章一〜五節

1 初めに言があつた。言は神と共にあつた。言は神であつた。2 この言は、初めに神と共にあつた。3 万物は言によつて成つた。成つたもので、言によらずに成つたものは何一つなかつた。4 言の内に命があつた。命は人間を照らす光であつた。5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかつた。

初めに

本日は、アドベント第三週の水曜ですので、クリスマスにちなむ聖書箇所を開きました。ヨハネ福音書第一章です。「初めに」と書き出しています。「初めに」と聞きますと、ユダヤ人の多くは創世記を連想します。なぜなら、創世記の書き出しも「初めに」だからですし、しかも、ヘブライ語聖書は最初の単語をその書の名前にしますので、最初の単語「初めに」が創世記のヘブラ

イ語書名になっています。ですから、「初めに」が重なり合って響き、ヨハネ福音書と創世記は容易に結びつくのです。

しかし、「初めに」の表現は同じですが、創世記の「初めに」は動詞と連結する珍しい表現になっており、他方、ヨハネ福音書の「初めに」は、通常の副詞表現ですので、永遠の初めを表現していると解せません。創世記の書き出しと共鳴しつつも、ヨハネ福音書は、永遠のはじめにロゴス〔言〕が存在し、ロゴスは創造を担った神であり、ロゴスがイエスキリストであると宣言しています。

命

さて、創世記において神は、最初の人アダムに命の息を吹き入れ、生きるものとなりました。それは、無論、ユダヤ人にとっては周知のことです。体のことでなく、ユダヤ人にとって問題なのは、体の命が終わった後に残る内なる自分の命といえますか、魂の行き先のこと、永遠の命のことでした。ルカ福音書では、律法の専門家、さらには、要職に就いている議員までもがイエスキリストに「何をしたら永遠の命を受け継ぐ事が出来ますか」と質問しております。これに対し、イエスキリストは、神の国のために犠牲を払ってでも従う人が「この世でその何倍もの報いを受け、後の世で永遠の命を受ける」と答えています。

イエスキリストは、永遠の命について幾度も証言しています。比喻表現を用いて、「私は命のパンである…このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる」、また、「私が与える水はその人の内では泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」と語り、さらに、「私が道であり、真理であり、命である。私を通らなければ、だれも父のもとに行く事が出来ない」とも言っています。

使徒言行録は、パウロの伝道によって、この永遠の命がユダヤ人だけでなく異邦人にも与えられたことを伝えています。実に、イエスキリストこそ真実の神、永遠の命でした。

光

さて、ヨハネ福音書に戻りますと、ヨハネ福音書は、命が人間を照らす光であると説明しています。命を光に譬えております。光は、天地創造の最初のもです。また、主がモーセに幕屋建設を命じたとき、七枝の燭台の制作を命じています。七つの枝のついた燭台、メノラーは、今日のイスラエルの国の徴、国章にもなっており、安息日には今日においてもなおユダヤ人は、ローソクの光に照らされつつ祈りを捧げています。また、ダビデ王は、詩編の中で「主はわたしの光、わたしの救い、わたしは誰を恐れよう」と歌っています。

人間を照らす光について、パウロは「光から、あらゆる善意と正義と真実が生じる」と説明し

ています。善意と正義と真実は、パウロが霊の結ぶ実として説明している愛や平和などと共通するものです。愛や平和などの徳目が、この世界へ、実に、光のごとく放たれているというのです。光の存在によって闇の存在がはつきりと認識されます。イエスキリストは語ります。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」

光と暗闇

しかし、ヨハネ福音書は、「暗闇は光を理解しなかった」とも記しています。ヨハネ福音書は、別の箇所で「光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。∴真理を行う者は光の方に来る」と述べています。私たちは、二〇一七年のクリスマスを迎えようとしております。光を理解し、光に歩む者でありたいと願うものです。

はじめの一步

仙台広瀬河畔教会

望月

修

創世記 第一章二六～二七節

26 神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」

27 神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。

神が世界をお造りになられた際に、私たち人間は最後に造られました。そして、特別な地位に就くことになりました。冒頭の聖書の箇所は、その事実を語っているのです。

「神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう……』。『我々』とありますので、複数の神が相談をして造ったかのように受け取られかねないのですが、そうではなくて、神の存在の偉大さを表現している言い方だと言われています。

キリスト教の神は、例えば、礼拝の最後に、「頌栄」という仕方、いつも歌い、告白しますように、「父なる、子なる、そして、聖霊なる神」であります。そして、そういう独自の在り方をする、「唯一の神」である、と告白しています。

教理的に言い表すところの「三位一体の神」であります。聖書を読みますと、神がこのような神として証しされていることが判つてまいります。その「三位一体の神」が、ここで、「我々」と言っているのだ、と説明する人もいます。

「三位一体の神」については、このぐらいにして、むしろ、ここで、大切なことは、私たち人間が、「神に似せて、神にかたどつて造られた」ことであります。姿格好のことではありません。私たち人間は、神と関わつて生きて行く存在として造られた、ということなのです。

レスポンス (response) という言葉があります。「応答」と訳されます。そして、この言葉から生まれた言葉として、レスポンシビリティ (responsibility) という言葉があります。「責任」と訳されます。これらの言葉を用いて、説明するのがよいでしょう。

つまり、私たち人間は、神に応答する責任のある存在として造られた、ということです。人間は、同じく神に造られたいろいろな「もの」と比べて、偉大で、尊厳がある、というようなこと

だけではありません。むしろ、神に応答しながら生きる存在として造られている、ということです。私たちは、神に応答しながら、神に対して責任がある存在として、造られたのです。

このように言われて、どう思うでしょう。そんなことは、少しも考えていなかったし、思ってもいなかったのではないのでしょうか。

今あるように、とにかく生まれたからには、自分なりの目標を掲げ努力し生きていかなければならない。あるいは、他者に対して、少しは優しさや愛をもって生きて行こう。そのぐらいのことは、皆、考えるのです。

しかし、こうして神を礼拝することもその一つですが、神に造られた者として、神と関わって、何よりも、神に対して責任をもって生きて行くというようには、思いも、考えもしない。多くの人はそのように言うでしょう。

しかし、それだけ、私たちは、既に、神の「かたち」としての自分を、損ねているのです。本来の在り方をしようとしなくなったということから言えば、墜ちているのです。しかも、お互いに墜ちている私たちは、お互いの関係をも損ねてしまいます。いや、お互いだけでなく、この世界をも損ねることに加担して行くのです。

聖書は、それを「罪」と言います。罪は、何か悪いこと、いかがわしい思いを抱くことだけではありません。それよりも、神に背いていることです。つまり、私たちは、神に応答せず、神との関わりを断つという「罪」によって、自らを損ね、お互いを、そして、この世界をも損ねているのです。

所謂、人格崩壊です。そして、環境破壊です。神の意向を慮おもんばかることなく、身勝手な思いに駆られ、時にはなりふり構わず争うかのようにして突き進んでいるのです。そうして、気づかぬ内に、滅びに向かっているのです。

私たちは、本来の在り方を、回復する必要があります。しかし、私たちの力では、回復できません。救われる必要があるのです。

そうは思わない。突っぱねることもできます。それほどでもない。否定することもできます。努力や工夫が足りないだけだ、と思うことも自由でしょう。

しかし、どうであれ、神は、だからといって、ご自分の側からは、この私たちを、直ちに、滅ぼす、というようなことはなさりません。身勝手な私たちのなすがままに任せられる、ということはありません。しかし、神の側から、直ちに、見限ったりなさいません。むしろ、そんな私たちを顧

みられ、救いの御手を差し伸ばされています。

新約聖書の「ヨハネによる福音書」が、この世界に救い主イエス・キリストが遣わされていることを明らかにしながら、このように告げています。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである」(ヨハネによる福音書三・二六―二七)。

私たちには、救い主が遣わされています。この救い主とその救いを信じるだけでよいのです。そして、この神に祈り、礼拝することです。それが、神に応答する、人間としての第一歩であります。神にかたどられ、似せて造られている、本来の自分を回復し、再生させて行く、第一歩です。損ねている自分、損ねてしまっているお互いの関係とこの世界をも回復させて行く、はじめの一歩なのです。

今朝、こうして、共に、礼拝を捧げることができた幸いを思います。

父なる神。

実を言えば、私たちは自分がよく判りません。人と較べ、あるいは関わる集団の中で自分の位置や役割を思いながら、手探りで生活をしています。相手があつてのことですが、本当にしたいこと、果たすべきことを見出せません。お互いに不確かなのです。あなたを仰ぐことでこそ、託された使命、生きる意味や目的を知ることができ、知らされました。どうぞ、私たちを顧み導いてください。

この祈りを主イエス・キリストの御名によつて御前に捧げます。アーメン。

わたしはなお、神の中にいる

仙台東一番丁教会
瀬谷 寛

詩編第一三九篇一三〜一八節

13 あなたは、わたしの内臓をつくり

母の胎内にわたしを組み立ててくださった。

14 わたしはあなたに感謝をささげる。

わたしは恐ろしい力によって

驚くべきものに造り上げられている。

御業がどんなに驚くべきものか

わたしの魂はよく知っている。

15 秘められたところでわたしは造られ

深い地の底で織りなされた。

あなたには、わたしの骨も隠されてはいない。

16 胎児であったわたしをあなたの目は見えておられた。

わたしの日々はあなたの書にすべて記されている

まだその一日も造られないうちから。

17 あなたの御計らいは

わたしにとつていかに貴いことか。

神よ、いかにそれは数多いことか。

18 数えようとしても、砂の粒より多く

その果てを極めたと思っても

わたしはなお、あなたの中にいる。

「生きることは空しい」、そう考えたことがある人はこの中にいらっしやるでしょうか？

大きな活躍をする、それなりに生きがいをつかむ、そのために、苦しみ、もがき、悲しんで、あるいは愛し、歌って、喜んで。人は誰しも、そのような日々を持っています。この世で生きる

限り、そのような経験をいたしません。

ここにおられるのは、まだ若い、学生の皆さんが中心ですが、それでも、皆さんなりに、真剣に苦しみ、真剣に喜び、一所懸命生きてこられたことでしょう。

しかし、こういう考え方もできます。結局は、どんな人間であっても、病気にかかり、弱り、動けなくなり、そしてやがて必ず死んでいく。どんなに華やいだ、また、幸福な歩みを辿った人であつたとしても、です。人間は、やがては必ず消えていく存在です。最後には消えるために、あくせく生きている存在です。人間、死ねばそこで終わり、そこで全てが終わりです。

もちろん、自分が消えて無くなったとしても、自分の愛してきたものたちの胸の中に刻まれ、残る、ということはあるでしょう。その記憶の中にとどまり続ける、ということは、確かにあるでしょう。自分はそのために、つまり、人々の記憶に何事かを残すために生きていくのだ、そう考える人もあるかもしれません。けれども、その記憶がいつまでも続く、というわけではありません。その愛する者ですら、一人もこの世からいなくなる時が来るのです。必ず来るのです。そのような時、自分を覚えてくれる人が、まだどこかにいるか。そう考えると、生きるということ、特に一所懸命生きる、ということは、本当に悲しく、空しく、そして、寂しい思いをいたします。

しかし。この「しかし」は、大きな「しかし」です。神さまの記憶の中に生きる者は、そうではないのです。計り知ることもできないほど広く、大きな神のご支配は、結局は最後は消えてなくなってしまうような、ちっぽけなこのわたしの存在まで及び、神さまがこのようなわたしに目を留め、そして、その記憶にとどめてくださっておられる、ということです。

今日与えられた御言葉は、一人の詩人の、神さまに対する信仰の告白の言葉です。ちよつとわかりにくいですが、詩人の言葉として、お聞きください。「胎児であつたわたしをあなたの目はおられた、わたしの日々はあなたの書に全て記されている、まだその一日も造られないうちから」。この地上で、いつか誰も自分のことを知ることのなくなる、その時が来たとしても、そのときに、わたしたちの存在は空しく消え去り、意味のないものとなる、というわけではないのです。わたしの限られた命が、その誕生の日から、いえ、それよりもずっと以前から、今日に至るまで、神さまの永遠の記憶の中に覚えられている、ということです。神さまだけが持つておられる書物、神さまがお持ちのノートがあるのでしょうか。その命の書、デスノートではない、命のノートの中に、このわたしのこれまでの歩みのすべてが記憶されている、ということです。そのようにして、この限られた存在のわたしが、ずっと、神さまとの交わりのうちに入れられている、ということです。

人間は、どこであつても、たとえ、病に伏せる中でも、そして、たとえ地上の死の中にあつても、

決して孤独ではありません。詩人の言葉、「わたしはなお、あなたの中にいる」。一度聞いたら忘れられない御言葉です。あなた、すなわち、神さまの中に、わたし、すなわち詩人を始め、このちっぽけなわたしが、そしてすべての人間が、そこにいます。改めて、深く心に留めたいと思います。神さまご自身の中に、このわたしが置かれている。神さまの中に、このわたしを見出すことができる、だから決して孤独に打ちひしがれることはありません。ここに、このところに、わたしたちの人生が無駄にならない、空しくはならない、その道があります。

わたしたちを造り出し、命を与え、贖ってくださった神さまの命の中にわたしたちは受け入れられています。イエス・キリストというお方がそれを示してくださいました。イエス・キリストというお方は、わたしたちの存在が、わたしたちの命が、本当は神に覚えられている、そのことをはつきりと示すために来てくださった方です。道を外れてさまよい、滅びのがけつぷちにいた愚かな迷える一匹の羊であるわたしを、イエス・キリストは捜し求め、発見し、命をかけて救い出してくださいました。そのイエス・キリストのみ手の中に、そしてそのイエス・キリストの父なる神さまの中にわたしはいるのです。こんなに幸いなことがあるでしょうか。

今、人生が空しいと感じている人、今、ものすごく孤独を感じている人、どうか、神さまの中にすでに置かれているご自分を、見つけ出してください。

〈祈り〉

主なる神さま、わたしたちは、とても小さな存在です。けれども、この世の中で、誰も自分のことを顧みてくれなくとも、ただお一人、あなただけは、わたしのことを決して見放さずに見ていてくださり、記憶にとどめてくださることを、感謝いたします。あなたの中に覆い包まれて置かれていることを、わたしたちの側も思い出し、覚えていることができますことができますように。

主イエス・キリストのみ名によつて、祈ります。アーメン

遣り直し可能な人生

日本基督教団泉高森教会 阿部祐治

ルカによる福音書 第二二章五四～六二節

54 人々はイエスを捕らえ、引いて行き、大祭司の家に連れて入った。ペトロは遠く離れて従った。55 人々が屋敷の中庭の中央に火をたいて、一緒に座っていたので、ペトロも中に混じって腰を下ろした。56 するとある女中が、ペトロがたき火に照らされて座っているのを目にして、じつと見つめ、「この人も一緒にいました」と言った。57 しかし、ペトロはそれを打ち消して、「わたしはあの人を知らない」と言った。58 少ししたってから、ほかの人がペトロを見て、「お前もあの連中の仲間だ」と言うので、ペトロは、「いや、そうではない」と言った。59 一時間ほどたつと、また別の人が、「確かにこの人も一緒にいた。ガラリヤの者だから」と言い張った。60 だが、ペトロは、「あなたの言うことは分からない」と言った。まだこう言い終わらないうちに、突然鶏が鳴いた。61 主は振り向いてペトロを見つめられ

た。ペトロは、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われた主の言葉を思い出した。⁶²そして外に出て、激しく泣いた。

春季宗教強調週間の特別伝道礼拝に御奉仕させていただけることを大変うれしく思います。小生は今春4月より泉高森教会の牧師として奉仕することになりました。一九七一年東京神学大学院を卒業して、岡山、金沢、名古屋、岡山、東京の教会の牧師として歩んで四十五年になります。その間教師として成功した事よりも失敗した事の方が多かったですと反省させられています。私其他人から話を聞くととき、成功話よりも失敗話の方に耳を傾けるものではないでしょうか。

聖書の中にも主イエスに出会った人々の様々な対応の様子が記されている。その中で十二弟子の中の二人に注目してみたいのです。その一人は「イスカリオテのユダ」です。ユダとは「彼を賛美しよう」という意味で、本来は地名であったそれが十二部族の名となり、やがて個人名になったのです。

彼は「シモンの子」と呼ばれ、弟子の中では唯一南部出身者であった。主イエスから会計を委

されており信任が厚かった。そんなユダがやがて主イエスを裏切る事になる。太宰治著の短篇「駆け込み訴え」がある。それによるとユダは主イエスに出会いその魅力に引き付けられる。さらに同性愛的な感情をも覚える。当時ローマ帝国の支配に武力をもって反抗する熱心党の一員であったかも知れない。主イエスの人気が昂まり、ユダは主イエスが地上的な救い主になる期待を抱いたが、主イエスはそれを無視し、自らその意志の無いことを明らかにされた。そのためユダは極度に失望して、主イエスを殺すことを計画していた律法学者、祭司長、長老達と云われる当時の指導者たちの所へ行き、祭司長たちの提案銀貨三十枚というわずかな金額で主イエスを裏切る約束をしてしまう。その原因を聖書は「サタンが彼に入った」と記している。ユダは主イエスが弟子たちと共にゲッセマネの園で祈るために行つた際、「接吻する」ことによつて主イエスを捕えることに協力して裏切る事になった。

もう一人は「シモン・ペトロ」である。シモンはシメオン（神は聞いて下さる）という意味であり、十二部族の名となり、個人名となった、シモンは北部ガリラヤの漁師であり、主イエスの招きに応じて最初の弟子となった一人。バルヨナ（ヨナの息子）とも呼ばれ、十二人の代弁者として働いた。主イエスの大事な場面にヤコブ、ヨハネの三人のみが立ち会っている。ヤイロの嫁をいやす。山上の変容、ゲッセマネの園での祈り。主イエスのことを「あなたはメシア、生ける神の子です」

と信仰告白をなした時、主イエスから「ペトロ」という渾名を付けられている。彼は大変人間的な人物で、自信家でもあり、人間中心的に判断し失敗した。信仰告白をした時も主イエスからサタンと叱られている。最後の晩餐の時主イエスが弟子たちの裏切りを予告された時「自分だけは裏切りません」と大言壮語するのであるが、主イエスの予告通り三度主イエスを否んでしまった時、「外を出て激しく泣いた」のである。

ユダもペトロも主イエスに従うことに失敗した。ユダは自分の失敗を悔いて反省し銀貨を神殿に投げ込んだ後、自ら首をくくって自死した。ペトロは復活の主イエスに再び出会うことよつて「私を愛しているか」と三度伺われ「わたしの羊を飼いなさい」と使命に生きることが赦されている。神は私共を愛し、悔い改めて、従うことを待つておられる。

心渴く時

仙台東六番丁教会
中本 純

詩編 六三編一節〜二節

¹賛歌。ダビデの詩。ダビデがユダの荒れ野にいたとき。

²神よ、あなたはわたしの神^{かみ}。

わたしはあなたを捜し求め^{もと}

わたしの魂はあなたを渴き求めます^{もと}。

あなたを待つて、わたしのからだは

乾ききつた大地のように衰え^{おとろ}

水のない地のように渴き果てています^は。

『詩編』 六三編は紀元前十世紀頃、イスラエル王国の国王であったダビデによって歌われた詩

です。この詩が読まれた背景として、一節に小さい文字で書かれているように「ダビデがユダの荒野にいたとき」とあります。ダビデが荒野にいた時、それはどのような時だったのでしょうか？

旧約聖書の『サムエル記(上)』には、ダビデが「ジフ」と呼ばれる荒野にいた時のこと、そしてもう一つ「エン・ゲデイ」と呼ばれる荒野にいた時のことが記されています。それらは、ダビデが命を狙われていた際、何とか敵から逃れようと身を隠した場所でした。それは、ダビデが国王の座に就く少し前のことです。こともあろうに、その時ダビデの命を狙っていたのは自分が仕えている王、つまり、自分の主君であるサウル王であったのです。それまで信頼していた人から、ある時、何の前触れも無く裏切られ、命を狙われる。そうした出来事というのは、ともすれば、状況や内容は異なれど、私たち自身も人生の中で味わう辛い経験の一つではないかと思えます。裏切る側はそれなりの理由とそのタイミングというものがあるのだと思います。しかし、裏切られる側はいつも唐突に何の心の準備も無のままその時を迎えます。無防備になっている心は突然降りかかる災厄に対して何の耐性も持ち合わせていません。人生経験を重ねれば、多少は慣れっことなることもあるのかも知れませんが、しかし、それでも裏切られる経験というものは何度繰り返しても辛いものです。いつまでもその人から被った出来事が思い出として心に残っ

てしまいます。そのように、主君から突然命を狙われることになったダビデですが、彼の心はまさしく「荒れ野」のようであったことが歌われています。「荒れ野」とは、ダビデが身を隠した場所でありますが、同時に彼自身の心の風景を指し示していると言えます。日本語で「荒れ野」と言っても、いまいちピンとこないかも知れませんが、これはつまるところ草木が一本も生えていない「砂漠」を指します。どこまでも続く砂の丘陵地帯。そこにただ一人、孤独に佇むだけの自分。それは、私たち誰もがそうした経験の最中で味わう「心の風景」を表しています。

二節を御覧頂くと、次のようにあります。

「神よ、あなたはわたしの神。わたしはあなたを捜し求めわたしの魂はあなたを渴き求めます。あなたを待つて、わたしのからだは乾ききつた大地のように衰え水のない地のように渴き果てています。」

敵から命を狙われているダビデは「神よ、あなたはわたしの神。」と言って神様を呼び求めています。『マタイによる福音書』二七章四六節を御覧頂くと、イエス・キリストが十字架にお架かりになった際に「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と口にされているのが分かります。「わが神、わが神」そのように神を呼び求めている姿がここでのダビデの姿と重なって見えてきます。

さて、そのように神様に助けを求めるダビデですが、ここでの二節の言葉で、皆様は「ある変化」にお気づきになられたでしょうか？それはこの二節後半の文章、「あなたを待って、わたしのからだは乾ききった大地のように衰え水のない地のように渴き果てています。」と語られているところで、同じ「かわき」という言葉が「乾き」と「渴き」でわざわざ異なった漢字で表記されているということですよ。実はこれには理由がありまして、これら二つの「かわき」は元の言葉であるヘブライ語でそれぞれ異なった意味を持つ単語が使われているのです。最初の「乾き」は水分が無く、乾燥して干からびた状態を指す言葉・ツィヤー（乾燥する）が使われています。その後の「渴き」は私たちの心が何かしらの潤いを求めて渴望したり、慕い焦がれる状況を表す際に用いられる・カマハ（慕い焦がれる）が使われています。そうすると、ここでのダビデの言葉というのは、自分の体が水を求めて乾ききった状態でありながら、それ以上にその心は神様を慕い焦がれて渴望している、と告白していることが分かるのです。神様を求める私たち人間の心が砂漠の砂のように渴いたものとして喩えられる描写を用いつつ、私たちの心と神様との関係は砂漠の砂と水以上に密接なものであるということを聖書は伝えているのです。先程も御紹介したイエス様の十字架の場面ですが、『ヨハネによる福音書』一九章二八節には次のような文章が出て参ります。

「この後、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、『渇く』と言われた。こうして、聖書の言葉が実現した。」

イエス様が十字架の上で息を引き取られる前に口にされた「渇く」という言葉。これは確かに喉の渇きを訴える言葉ではありませんが、それ以上に先程出て参りました「心の渇き」を意味する言葉でもあることが分かります。考えてみれば、イエス様は御自分を公に顕すこととなるガリラヤ伝道に赴かれる前に、荒れ野に向かわれました。「荒れ野」、つまり「砂漠」です。そこにおいて私たちが人生において味わう心の渇きを徹底的に味わわれたのです。そして、そのことは御自分の生涯の最期の場面である十字架上においても味わわれたことが伺えます。なぜ、神の御子御自身がそのような心の渇きを覚える必要があつたのでしょうか？それは、このお方が私たち人間の罪を贖い、そこから私たちを救い出してくださるために、私たちが人生の中で経験する心の渇きをその極みに至るまで徹底的に味わうことを必要とされたからです。私たち人間の体は、水無くしては生きていけないものです。そして、何よりもダビデがここで歌っているように、私たちの心もまた神無くしては生きていけないものなのです。私たち人間はそのように生まれもつて神様を慕い求めるように造られた生き物なのです。だからこそ、苦しみの極みで神様を呼び求めるのです。

ふとした拍子で、私たちの心というものが砂漠に一人、取り残されてしまったような、そうした孤独感、空しさ、果ては絶望感に覆われてしまう時があります。そうした時、そっと周りを見渡して、そして静かに耳を傾けて頂きたいと思えます。私たちが味わっている「自分にしか分からないこの苦しみ」を誰よりも理解してくださり、私たちのために必死な形相でその苦しみを担ってくださろうとする救い主のお姿が見えてくる筈です。このお方は私たちのためにいつも神様に祈りを捧げ（ルカ二二・三三）、私たちに決して渇くことのない水（ヨハネ四・一三）を与えてくださいます。ある時突然、主君から命を狙われるようになったダビデが孤独の只中で「神よ！」と叫んだように、人生の悲惨な場面の只中で条件反射的に「神よ！」と叫ぶ私たちがいます。そうした時、どうか目を閉じて祈りを捧げて頂きたいと思えます。決してあなたが一人ではないことが分かる筈です。

あなたの罪は赦された

石巻山城町教会 関川 祐一郎

ルカによる福音書 第七章三六〜五〇節

36 さて、あるファリサイ派の人が、一緒に食事をしてほしいと願ったので、イエスはその家に入って食事の席に着かれた。37 この町に一人の罪深い女がいた。イエスがファリサイ派の人の家に入って食事の席に着いておられるのを知り、香油の入った石膏の壺を持って来て、38 後ろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った。39 イエスを招待したファリサイ派の人はこれを見て、「この人がもし預言者なら、自分に触れている女がだれで、どんな人かわかるはずだ。罪深い女なのに」と思った。40 そこで、イエスがその人に向かって、「シモン、あなたに言いたいことがある」と言われると、シモンは、「先生、おっしゃってください」と言った。41 イエスはお話しになった。「ある金貸しから、二人の人が金を借りていた。一

人は五百デナリオン、もう一人は五十デナリオンである。42 二人には返す金がなかったの
で、金貸しは両方の借金を帳消しにしてやった。二人のうち、どちらが多くその金貸しを
愛するだろうか。43 シモンは、「帳消しにしてもらった額の多い方だと思えます」と答えた。
イエスは、「そのとおりだ」と言われた。44 そして、女の方を振り向いて、シモンに言われた。
「この人を見ないか。わたしがあなたの家に入ったとき、あなたは足を洗う水もくれなかつ
たが、この人は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれた。45 あなたはわたしに
接吻の挨拶もしなかつたが、この人はわたしが入って来てから、わたしの足に接吻してや
まなかつた。46 あなたは頭にオリブ油を塗ってくれなかつたが、この人は香油を塗って
くれた。47 だから、言っておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛
の大ききで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」48 そして、イエス
は女に、「あなたの罪は赦された」と言われた。49 同席の人たちは、「罪まで赦すこの人は、いつ
たい何者だろう」と考え始めた。50 イエスは女に、「あなたの信仰があなたを救った。安心
して行きなさい」と言われた。

聖書は私たちの「罪の赦し」を語ります。アダムから始まる私たち人間が神さまに対して負つ

てしまった罪を、神さまは愛する独り子イエス・キリストを通して赦してください。これが今日まで長きにわたって、聖書が語り続けている福音（良き知らせ）です。しかも、この罪の赦しは人間が努力して、善い行いを積み重ねた結果獲得できるものではありません。ロッククライミングのように厳しい岩場を、何とか上り切った頂上に、罪の赦し、罪からの救いというゴールが用意されているのではないのです。神さまの方から私たちにはしごをかけてくださり、私たちがのもとに降りてきてくださって、手を差し伸べて罪の赦しを与えてくださるのです。ですから、罪の赦し、罪からの救いとはただ一方的に神さまの恵みによって「与えられる」ものです。

さて、今日の聖書にはある一人の女性が登場します。この女性の名前は記されず、ただ「罪深い女」と紹介されています。この女性が宴席に招かれていた主イエスのもとにやってきました。ちなみに、この宴席の主催者はファリサイ派のシモンという人物でありました。ファリサイ派というのはユダヤ教の中でも、律法を厳格に守ろうとするグループでありました。ですから、自分たちは律法に忠実に生きているという自負とプライドがありました。この女性は他の大勢の客にまぎれて、そつと主イエスのもとに近づきました。

そして、後ろから主イエスの足のもとに近寄り、泣きながら、主イエスの足に接吻して香油を塗りました。泣きながら主イエスの足を洗う女性の姿が印象的に描かれます。聖書にはこの女性が

どのような罪を犯していたのかは記されていません。しかし多くの研究者がこの女性は娼婦であったのではないかと推測しています。

自らの敬虔さや、信仰深さを自負するファリサイ派の人々から見ればこの女の罪は明らかでした。そして、彼らは自分は罪深いこの女とは違う、そのように思っていたのです。

「罪深い女」は一体どのような思いで主イエスに近づいたのでしょうか。この女は主イエスに後ろから近づきます。恐る恐る近づいたのかもしれない。彼女は自身の罪を自覚していました。そうであるからこそ、主イエスの足に、涙を流してしまうのであります。主イエスの足もとでもはや抑えることのできない涙がとめどなく流れてきました。この様子を見たファリサイ派のシモンは言いました。

「この人がもし預言者なら、自分に触れている女がだれで、どんな人か分かるはずだ。罪深い女なのに」。

シモンは主イエスがもし神からの預言者であれば、主イエスのもとに来た女の罪を見抜き、律法に従って正しく裁かれるはずだと思ったのです。そこで、主イエスがどうなさるのか、じっと見つめていました。主イエスはシモンの心の内を見抜いて言われました。

「シモン、あなたに言いたいことがある」。こう言って主イエスはある金貸しのたとえ話をお語

りになりました。

ある金貸しから二人の人がお金を借りていました。一人は500デナリオン、もう一人は50デナリオン。1デナリオンが大体1日分の賃金と言われますから、結構な金額です。ところが、二人ともこの多額の借金を返すお金がありませんでした。そこで、金貸しは二人の借金を帳消しにしてやりました。このたとえから何を讀み取ることができるでしょうか。ここではもちろん金貸しは神さまに例えられており、金を借りているのは私たち人間であります。神は誰かを多く愛し、誰かを少なく愛す、そのようなお方なのでしょうか。ここで語られることはそういうことではありません。自分がどれだけ多く赦されているかを身にしみてわかる人がおり、自分のことをそれほど罪人とは思わない人がいるということです。私たちが負っている罪というものの大きさがどれほどのものであるかということが明らかとなるのです。それはとても私たち自身の手で、私たちの力によって返せるものではないのです。神さまによる赦しが与えられなければ、滅びる他ない私たち。しかし、神さまは御子イエス・キリストを通してその罪を贖ってくださいました。私たちの罪という負債を自ら買い取ってくださいましたのです。神さまにとって最も愛すべき存在である独り子イエス・キリストを通してです。イエス・キリストは私たちが負ってしまった大きな罪を赦してくださいました。ここには計り知れないほどの神さまの大きな愛があります。

主イエスはご自身のもとにやってきたこの女性に対して、一言おっしゃいました。

「あなたの罪は赦された。」「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」

主イエスはもちろん、この女性の犯した罪をご存じでありました。この女性は、自ら犯した罪に縛られ、その罪の重さに苛まれ、押しつぶされそうになっていました。もはや罪の重さに耐えられなくなっていたのです。何とかして、罪から解放されたい。救いを与えられたい。そのように思いで主イエスにすがりました。この女性の罪を主イエスは赦してくださいましたのです。

ここから、私たちが見つけたいことは、赦しは与えられるものであるということです。「赦す」という言葉は、英語では *forgive* という言葉です。辞書で調べてみると、この言葉は元来強意を表す *for* という語と *give* (与える) という言葉が組み合わさった言葉であることがわかります。つまり、その元来の意味は「すつかり与える」というニュアンスがあるのです。与えるには、相手を受け入れなければなりません。ですから相手を赦すということは、相手を心から受け入れて、自分自身を完全に明け渡すということでもあるのです。主イエスはこの罪深い女性を受け入れてくださり、赦しを与えくださいました。世間からは冷たい視線を向けられ、社会の中に居場所もなく生きてきた一人の女性の人生が、主イエスとの出会いによって大きく変えられました。主イエスは私たちをも、罪深き女と全く同じように受け入れ、罪の赦しを与えてくださいます。救い

は自分自身の内側にはありません。救いは私たちの外から与えられます。最初にも述べたように、大切なことは私たちが救いを獲得するのではなく、外から与えられるのだということです。そして聖書はその救いと赦しがイエス・キリストもとにあるのだと私たちに語りかけています。私たちは一人一人が主イエスの愛の内に招かれているのです。この招きにお応えして歩んで参りたいと思います。

大いなる自由

東北学院中学校・高等学校宗教主任 松井浩樹

ルカによる福音書 第一五章一一―三二節

11 また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。12 弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。13 何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使いしてしまった。14 何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。15 それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやっつて豚の世話をさせた。16 彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。17 そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。18 ここをたち、父のところに行つて言おう。』お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに

対しても罪を犯しました。19もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にして
ください」と。』20そして、彼はそこをたち、父親のもとに行つた。ところが、まだ遠く
離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄つて首を抱き、接吻した。
21息子は言つた。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯し
ました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』22しかし、父親は僕たちに言つた。『急
いでいちばん良い服を持つて来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履
かせなさい。23それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。24この息子は、
死んでいたのに生き返り、いなくなつていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始め
た。

25ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに來ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてき
た。26そこで、僕の一人を呼んで、これはいつたい何事かと尋ねた。僕は言つた。『弟さん
が歸つて來られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたの
です。』28兄は怒つて家に入ろうとはせず、父親が出て來てなだめた。29しかし、兄は父親
に言つた。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたこと
は一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会するために、子山羊一匹すらくれ

なかったではありませんか。30ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなた
の身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』31すると、父親
は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。
32だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。
祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』

みなさんも聞いたことがあるかもしれない。イエス・キリストが語られたたとえ話の中で、
最も有名なたとえの一つ、「放蕩息子」のたとえです。日常生活では「放蕩」という言葉をあまり
耳にしません、要するに自分の欲望のままにふるまう、もつと分かりやすく言いますと「ひど
くやんちゃな息子」とも言えるでしょう。いずれにしても、決してほめられたものではなく、あ
きらめるしかない、「悪の限りをつくす息子」というような意味であります。そのたとえ話になり
ます。

さて、その息子は、まず父親が亡くなってから、分配される予定であった財産を、父がまだ生
きているうちに、分けてもらおうというところから、たとえばが始まります。そこで、その息子がとつ

た行動が、まず自宅から離れた「遠い国」へ行ったと記されておりました。この「遠い国」という言葉は象徴的に記されています。ただ単に、距離が遠い、外国へ行った、という意味ももちろんあります。しかし最も重要なのは、「父親」と「その息子」であるという、状態から遠く離れた関係で、生きようとしたということです。

みなさんも、どうでしょうか。現に今、保護者と離れて一人暮らしを経験している人もいます。今思えば高校時代に、親から離れての一人暮らしにあこがれていた人も随分といえるのではないのでしょうか。大学生になって、町の中で一人暮らしをするという憧れがあります。何といても保護者がいないのですから、何をして、まず怒られることはありません。夜更かしも気にすることはありません。朝も何時に起きようとも遠慮することは、まったくないのであります。しかも、この放蕩の限りを尽くす息子は、保護者から財産を生前に贈与されているのです。途方もない金額であったことが想像できます。

そう考えますと、このたとえに登場する息子の姿が見えてきます。あの父から離れることにこそ、自分にとつての本当の自由があると考えたのであります。そこで物語は進みます。確かに最初は楽しくて仕方がなかったようです。みなさんはいかがでしょうか。一人暮らしの皆さんも、確かに一人暮らしが始まった当初は楽しくて、仕方がなかったのではないのでしょうか。それなりの親

しい友人もできて、しばらくは刺激的な興奮した日々が続いたのではないのでしょうか。そのような毎日が楽しくて仕方がなかった様子が聖書にも記されるのです。

しかし、状況は一変します。その大きな理由の一つに、父親からもらったお金が、すっかりなくなってしまったのです。すると、どうでしょう。周りにいた友人たちもその息子から離れていったのです。ついには、一人だけになってしまい、あげく、食べる物にも困ってしまった。ついには家畜の餌になる豆を食べつつ、空腹をしのぐのです。

さて、ここからが、ポイントです。一七節の言葉です。この息子は「我に返った」とあります。つまり、「本当の自由とは何か」、について「我に返った」のです。父から離れることにこそ、本当の自由があると考えたことが、間違っていたのではないかと「我に返った」のです。確かに、高校時代に描いた楽しい一人暮らしの幻も、経験すると想像以上にさみしいものであるし、すべての夜寝るから朝起きるまで、責任を伴う行動が必要で、これもなかなか大変であると感ずる。まもなく、実家に帰省する人もいるでしょうが、そのありがたみを改めて、感じたりもするのではないのでしょうか。

では、「本当の自由」とは何でしょうか。父から解放されることには、自由がなかった。むしろ、まわりに誰もいないわけですから、自分で勝手に生きるしかなく、かえって不自由になってしまっ

たのです。本当の自由とは、一人の息子として、父と本来の親子関係、人間関係を回復することこそが本当の自由、であることを悟ったのです。

今日のたとえば、父、息子という言葉から、皆さんに対して親子関係の回復の勧めだけにはとどまりません。父・子というのは、実は「私たちと父なる神」との関係回復のたとえであります。その父なる神との関係回復を土台にするところに、私たちが、実は本当の自由に至る道があることを伝えるのです。

自分がかんじがらめにならないでください。目先だけの誘惑とも思えるような自由に惑わされないでください。今日の聖書が語るのは、神との人格関係の回復、つまりこの礼拝を土台とするところに、実は本当の自由がある、自由にされていくということなのです。年末が近づいてきました。父なる神の見守りの中で、み心にかなう成長を遂げ、一年のよき締めくくりにつとめてまわりたいと願うのです。

祈り、主イエスの父なる神様。

豊かなる命を与えられ、礼拝をささげられます幸いを感謝いたします。

あなたから与えられております、大いなる自由をしっかりと用いて、これからも良き成長が

与えられますよう祈ります。

この祈りを主の御名によって祈ります。アーメン。

主イエスに導かれて

東北学院榴ヶ岡高等学校 宗教主任 西間木 順

ルカによる福音書 第一五章一〜七節

1 徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。2 すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いました。3 そこで、イエスは次のたとえを語された。4 「あなたがたの中に、百匹の羊を持つている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。5 そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。7 言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」

今日与えられました箇所には、「見失った羊」のたとえ、という小見出しがついておられます。主イエスのたとえ話の中でも有名なたとえ話の一つです。みなさんの中にも、このたとえ話をすでに知っておられる方もおられるのではないかと思います。

羊はどのような習性を持つ動物か、皆さんは知っていますか。羊は群れで行動する習性があります。外敵から身を守るための習性で、群れから離れるとストレスを感じてしまうようです。羊は基本的に憶病な動物です。危険があるとパニックを起こして逃げ出そうとします。もし群れの中の一匹がパニックになると、他の羊もパニックになり、一斉に逃げ出すのです。もし群れからはぐれてしまったら、自力では道を見つけて戻ることはいけません。羊飼いはこのような羊を牧草地へと導いて行くのです。羊は、羊飼いの声を聞きわけることができ、羊飼いのあとをついていくのです。

主イエスは、人間をこのような羊にたとえられたのです。それでは「見失った羊」とはどのような人間のことを言っているのでしょうか。

ファリサイ派の人たち、律法学者から、罪人だとみなされた人たちです。ファリサイ派の人々や律法学者たちは、旧約聖書に書かれてある律法をよく学んでいたのです。それをきちんと守つ

ていると自覚していた人たちです。律法をきちんと守っているから、自分たちは神から当然愛されてはいるはずだと考えていたのです。その一方で、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、律法をきちんと守っていない人たちを罪人だとみなしていたのです。罪人は律法をきちんと守っていないから、神から愛されていない人たちなのだと思なしていたのです。主イエスは罪人と見なされた人々、徴税人を、群れからはぐれてしまった「見失った羊」にたとえているのです。「見失った羊」にたとえているのは、ファリサイ派から罪人と見なされた人たち、徴税人だけではありません。私たちもまた「見失った羊」なのです。

羊飼いは、見失った羊を捜しに行きます。なぜ羊飼いは捜しにいったのでしょうか。羊飼いが見失った羊を捜しにいったのは、羊が羊飼いにとって自分のものであり、自分にとって大切なものだったからです。大切なものを失いたくないから、羊飼いは必死に捜したのです。「自分にとって大切なものを見失ったら、必死に捜す」。これは誰にでもあることです。この思いは誰とでも共有することができます。

主イエスはこの誰にでもある思いに目を向けさせようとしているのです。「自分にとって大切なものを見失ったら、あなたは当然必死に捜しますよね」ということを主イエスがこのたとえを用いて伝えようとしておられることなのです。そして「神だって同じお気持ちなのだ」ということ

を示そうとしておられるのです。旧約聖書イザヤ書には、「わたしの目にあなたは価高く、貴く」と書かれています。神は私たちを分け隔てなく、大切な存在と思ってくださいているのです。「あなたの存在は私にとって尊いものなのだ」と言ってくださいていることに、目を向けさせようとしているのです。

羊飼いは見失った羊を捜しに行きます。この羊飼いは主イエスのことです。道からそれて、どうしようもなく、身動きがとれなくなつた私たちを、捜しに来て、見つけてくださるのです。そして「私と一緒に神の道を歩こう」と呼びかけてくださっているのです。ここで私たちに決断が迫られます。「主イエスと一緒に神の道を歩くかどうか」という決断です。主イエスと共に神の道を歩くこと、これは言い換えれば悔い改めです。悔い改めはギリシア語で、メタノイアと言います。メタノイアを逆から読みますと、「愛のため」です。主イエスの呼びかけに応えること、すなわち悔い改めるとは、神の愛の生活に方向転換することです。私たちは主イエスの愛によって生かされ、導かれていることを心に留めたいのです。どうしたらよいか悩み苦しんで、身動きが取れなくなり生きる力を失いそうになっている私たちのところへ主イエスが来てくださり、生きる力を与えてくださることを心に留めたいのです。どんなときも主イエスが共にいてくださるから、私たちは生きることができると心に留めたいのです。と同時に、私たちの周りにも、悩み苦しんで、

生き方がわからなくなっている人たちの側に行き、共に生きようとする、隣人への愛の実践をしていきたいのです。このことが、主イエスの呼びかけに応え、主イエスと一緒に神の道を歩くことになるのです。

〈祈り〉

父なる神

新しい命を与えてくださり、この学校へと招いてくださり感謝いたします。

あなたの招きに応え、共に礼拝を捧げることができまことを感謝いたします。

あなたはどんな時も、わたしたちと共にいてくださり、わたしたちを導いてくださっています。私たちが道に迷い、生きる力を失いそうになる時も、生きる力を与えてくださっています。そのことを片時も忘れることなく、これから歩むことができますように。

あなたの呼びかけに応える者としてください。

この祈り 尊い我らの主 イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

人生は旅である

宗教部長 野村 信

創世記 第十二章一〜四節

- 1 主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい。2 わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める。祝福の源となるように。3 あなたを祝福する人をわたしは祝福し、あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて、あなたによって祝福に入る。」
- 4 アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。アブラムは、ハランを出発したとき七十五歳であった。

人生は旅である。旅は、また人生の縮図である。

先日、ある講義の中でこのように語り、後で学生たちにその日の講義の自由な感想を求めたと

ころ、この言葉に共感するという回答がありましたので、本日は、旅ということについて考えてみたいと思います。

まず、「人生は旅である」というこの言葉は、聖書が最も雄弁に語っている言葉です。聖書の最初の歴史的登場人物であるアブラハムが、まさに旅という人生を送った人です。そして新約聖書のヘブライ人への手紙においては、信仰者はみな旅人であると語っています。そこで、人生は旅ということと、また聖書がなぜそれほど人生を旅と語っているかについて考えてみたいのです。

先ほどお読みしました創世記の十二章には、アブラ（ハ）ムがハランからカナン地方へ向かう様子が描かれています。アブラハムにとつては、まさに青天の霹靂というべき、天からの声を聴いたからです。それは、カナン地方へ向かい、そこで暮らすようにというお告げでした。しかもアブラハムには子供がいまいませんでしたが、アブラハムの子供たちは増え広がり、アブラハムは彼らの祝福の源になると告げられたのです。

とにかく、この約束を心に抱き、神の声に従って、アブラハムと妻サライの一行はカナンの地に出かけて暮らしました。アブラハムは晩年になってようやくイサクという子供を得ましたが、地に増え広がるという神の約束が実現するには、気の遠くなるような未来の約束でした。しかし、彼は旅立ちました。そして、生涯寄留者として、旅の人生を送りました。おそらく、アブラハム

は心の中で、「私の出発するという人生が、はるかかあなたに実現する約束に向かっている旅であり、後世に大きな出来事をもたらす旅である。しかし現実には何も起こりそうにないが、その約束のために生涯を生きよう」という決意があったと思います。そしてその後の神を信じる信仰者たちもみな、神の約束をいつも希望として心に抱いて進んでいくという生き方をしたのです。現在、アブラハムの時代からほとんど四千年の歳月が過ぎていますが、今、世界の総人口の半分がアブラハムを仰ぎ、信仰の祖先としてるので、ただただ驚き、神の約束の確かさと、またアブラハムが一途に、神を信じて生き、旅立った姿に心打たれるのです。

もう一人、旅の人生を送ったというべき代表的な信仰者は、パウロという初期の教会の立役者でした。彼は、地中海東海岸を三回も旅をし、キリストの福音を宣べ伝え、各地に教会を建て、働きをしました。この人は、コリントの教会に宛てた手紙の中で、「信仰と希望と愛はいつまでも続く。その中でも愛が最大である」と語りました。パウロの生涯は、迫害と投獄、困難と危険の連続の中でありました。しかも自分の信じるキリストの教会は、風前の灯のように、弱弱しかったのです。しかし、パウロは、未来に、キリストを信じる信仰者が増え広がり、神への希望が人々の支えになることを予感し、しかもアガペーという愛が最も大切にされ、力をもつと信じた人でした。

パウロの時代から二千年たった現在、私たちは、今もまさにこの言葉が本当であることを実感します。私たちは、愛において生き、倒れもします。聖書の教えとは一見関係がないように思えますが、現在も私たちは、人間には愛が必要であり、また災害があれば、なんとか手助けや募金をし、「愛は地球を救う」などという言葉も口にして、人々を助け、支え、平和と共生の社会を作ろうと努力します。

ところで、人生が旅であるという理解は、聖書の特権ではないということは皆さんもお分かりでしょう。例えば日本の文化の中でもしばしば人生は旅であると言われてきたからです。松尾芭蕉が、江戸から東北・北陸と旅をしながら俳句を歌ったわけです。芭蕉の書いた『奥の細道』の冒頭には、現代語読みをすれば、「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也」とあるわけです。月日そのものが、旅人のようだと言っているわけです。他にも、有名な旅行日記もあれば、出家していく人々は、「漂泊の旅」とか「放浪の旅」を送ったわけです。

聖書で言われる、「信仰者の人生は旅である」ということと、私たちが一般に旅をすることとどう違うのか考えてみたいと思います。

人生は旅である、と私たち信仰者が言う場合に決定的なことは、この旅が片道切符の旅だということ。これからゴールデン・ウィークが始まりますので、旅行に出かけようと計画してい

る人もいると思いますが、私たちの旅行は、必ず往復切符を購入します。出発したところへ戻ってくるのが短期間の旅行では当たり前のことです。芭蕉も江戸から北上して、大垣に帰ってきました。しかし、「人生は旅である、私たちは旅の人生を送る」と言った場合には、もはや後戻りが出来ない旅を意味します。そういう点で、どこかに向かつていく旅であり、そこには終着点、目的地があるわけです。

人生という旅は後戻りできない。ならば、旅の一時一時を大切にし、かけがえのない一日一日を送ろうと決心することも大切でしょうが、一方で人生が旅であるということは、もはや戻れないけれども、本当のふるさとへ向かう旅であると言うこともできます。聖書が、人生が旅であると語っている理由はこの点にあります。まだ見ていないが、約束として告げられている神のふるさとに帰る、あるいは神のふところに向かう旅であります。そこに行き着くという目標をもつことで初めて、まことに「人生は旅である」と言い切ることができます。

折しも、私たちは、これからの連休をどう過ごすかという時を迎えておりますが、帰省する旅でも、遠出を計画している人も、あるいは日帰りの旅をする人も、あるいはどこにもいかないという人も、時は確かに私たちを次のステージに運んでいきます。この時、それぞれの人生の歩み、旅がどのような意味をもつのか考えてください。その時に、聖書に記される信仰の祖先アブラハ

ムがまさに旅の人生を送り、未来を夢見て、しかも天を仰ぎながら旅したことが、その後の人類にとって大きな意味をもつ旅であったことを自分の歩みと照らし合わせて考えてほしいと思います。

主なる神様、私たちの人生は、まさしく旅であり、後戻りできない、未来に向かう旅です。アブラハムが、またパウロが、そして多くの信仰者たちが、まことの故郷に向かつて進んでいく人生を送ったように、私たちも、それぞれの人生の歩みから、まことの故郷へ向かう旅をしていることに気付かされ、希望へ向かう歩みをさせてください。

この祈禱を主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

走り続けること

大学宗教授任 阿久戸 義 愛

ヘブライ人への手紙 第十二章一―三節

1 こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびただしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか、

2 信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をもいとわないうで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。

3 あなたがたが、氣力を失い疲れ果ててしまわないように、御自分に対する罪人たちのこのような反抗を忍耐された方のことを、よく考えなさい。

五月病などという言葉がありますが、長期の休み明け、私たちはなぜか強い疲れを感じたり、がんばれない、というようなことがあると思います。先日、あるテレビ番組で「スポーツ選手の継続力」というテーマの特集が組まれていました。その番組では、一昨年（二〇一五年）に50歳で引退したプロ野球選手の山本昌投手がインタビュウを受けていました。彼は50歳まで現役を続けるという記録を残したわけですが、30歳を越えてからは、正月も休まず、毎日トレーニングを欠かすことはなかったそうです。年齢が高くなると、休むとむしろ休み明けが辛くなる、休むのではなく無理のないトレーニングを継続しているほうが疲れない、というのです。そういう生活をするには忍耐が必要でしょう。一日中寝ていたい、遊びたい、という欲求を抑えながら、忍耐しながら、しっかりとした足取りを、一定の速度で保つ、継続する。そういう必要があるわけです。考えてみれば、やはり私たちの生活は、無理の無い範囲で、一定のリズムで走り続けることが大事なのかもしれません。

『ヘブライ人への手紙』は、パウロが書いた手紙と考えられていたことがありましたが、今では誰が書いたのかわからないとされています。この手紙の著者は、信じるということ、信仰を、走ること、「競走」に喩えました。第二章を読みましたが、少し前の第十章では、私たちが正しく

生き、神の御心を行ない、約束のものを手に入れるためには、忍耐が必要であると、述べられています。私たちの日常生活においても、欲しいものを手に入れるためにはしばしば忍耐が必要です。忍耐することは容易なことではありません。しかし、いつか必ず約束が成就する、いつか必ず目的のゴールに辿り着く、という希望を持ちながら、信じながら、忍耐しつつ、ゴールに向かうならば、私たちは最後まで走ることができるのです。

今日の聖書の箇所、第十二章の冒頭ですが、いきなり「こういうわけで」と始まっています。どういうわけか、と言いますと、直前の第十一章で、旧約聖書に精通していたと思われるこの手紙の著者は、旧約聖書に描かれているたくさんの人々のことを振り返っています。旧約聖書に登場する人物には、英雄的な活躍をする人物もいれば、悲劇的な苦しみを味わう人物もいます。しかし、いずれも神への堅い信仰によって、人々に、人間がどのように生きるべきなのか、神が私たちに何を期待しておられるのかを示した人々でした。キリスト教ではそのような人々のことを「証人」、神様のことを証しし明らかにする役割を負った「証人」と呼びます。旧約聖書の人々は、自分たちを取り巻く苦しい状況が、いつか解消される、解決される、と信じ、救い主の到来を待ち望み、耐え忍びながら、自分の目の前にある課題・難題に取り組んでいました。いつまで続くのかわからない、いつまで走り続けたらいいのかわからない、そんな状況でも、彼らは希望を持つ

て、走っていたのでした。この手紙の著者は、そのような旧約聖書に出てくる人々のことを説明したうえで、「こういうわけで」と言います。私たちの数多くの先輩たち、私たちより先に走った人々を見て、私たちもまた、しっかりと走ろうではないか、と呼びかけます。

重荷を捨て、絡みつく罪をかなぐり捨てて、と言います。重荷とはなにか。私たちはマラソンするとき、なるべく負担にならない軽い靴をはき、服装も軽快にします。余計な荷物をぶらさげず走ったりしません。人生の道のりを走るのに不必要なものは置いて行きます。それ以外のものは「重荷」です。絡みつく罪とはなにか。罪とは、私たちを本来のレースから離れさせ、寄り道させようとする誘惑の声、自分の心の弱さです。走るのをもうやめてしまおうか、別のもっと楽な道にしようか、というような疑いの声です。それらをかなぐり捨てて、自分の、自分自身の競走を、しっかりと走りきろうではないか、と訴えます。

著者は、この手紙を送る先にいるヘブライの人々が、様々な困難の中にあつて、もう疲れ切つてしまっていることを、よく知っていました。一所懸命がんばっているけれど、もう疲れ切つてしまっているのです。そこで、今、旧約聖書の人々のことを思い起こさせたのです。彼らだって、苦しみの中を通つたのだ。あなたと同じ苦しみを味わいながら、それでも希望を持って走った人たちがいる。彼らの存在は、あなたを励ましている。だから元気を出しなさい、と言っています。

そして、誰よりもイエス・キリストこそ、自分の栄光を捨て、恥と嘲笑の的にされることをいとわず、十字架の死にいたるまで従順に、神様に与えられた困難な道を走りきられたのです。

心理学では、たとえば鬱病の人に「がんばれ」と言っただけではいけないことになっています。パウロは疲れ切っている人に、気合いでがんばれ、と言っているのでしょうか。いえ、違います。目を上げてごらんなさい、と言っているのです。あなたは独りきりで走っているつもりになって、本当に辛くなってしまうているかもしれない、でもそれは違う、あなたの周りには、あなたの目の前には、一緒に走ってくれる先達たちや仲間たちがいる、そして何よりも、一緒に励ますように前を走ってくれるイエス・キリストの姿がある。それを見てごらんなさい、その人たちと一緒に走ろうじゃないか。そう呼びかけているのです。

私たちが、忍耐をもって走るとき、精根尽き果て、気力も果ててしまうときがあります。独りきりで走っているように思ってしまう時、私たちはしばしば疲れ切ってしまう。困難の中では、浮かび上がってくる様々な疑いがあります。それが私たちにとって重荷となり、私たちを苦しめるのです。これらのものを取り払って、一心に神に近づいていく、正しい道を歩む、その道を走り続けようではありませんか、とパウロは勧めています。

目を上げてみましょう。隣りに一緒に走っている人がいます。同じように走っている人がいます。

そして目の前に、私たちを励ますように、私たちの先を走ってくれている多くの先達と、そして誰よりも、イエス・キリストの姿を見いだすことができるでしょう。

私たちが、苦しみや試練の中にいるとき、何よりも、イエス・キリストこそが、私たちを支えてくださいます。私たちはイエスにこそ、私たちは目を注ぐべきです。そのように、私たちのそれぞれの日々を走って行こうではありませんか。

熱情の神

大学宗教授任

北

博

出エジプト記 三四章四、十節、十四節

4 モーセは前と同じ石の板を二枚切り、朝早く起きて、主が命じられたとおりにシナイ山に登った。手には二枚の石の板を携えていた。5 主は雲のうちにあって降り、モーセと共にそこに立ち、主の御名を宣言された。6 主は彼の前を通り過ぎて宣言された。「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、7 幾千代にも及ぶ慈しみをを守り、罪と背きと過ちを赦す。しかし罰すべき者を罰せずにはおかず、父祖の罪を、子、孫に三代、四代までも問う者。」8 モーセは急いで地にひざまずき、ひれ伏して、9 言った。「主よ、もし御好意を示してくださいますならば、主よ、わたしたちの中であって進んでください。確かにかたくなな民ですが、わたしたちの罪と過ちを赦し、わたしたちをあなたの嗣業として受け入れてください。」

10 主は言われた。「見よ、わたしは契約を結ぶ。わたしはあなたの民すべての前で驚くべ

き業わざを行おこなう。それは全地ぜんちのいかなる民たみにもいまだかつてなされたことのない業わざである。あなたと共にいるこの民たみは皆みな、主しゅの業わざを見みるであらう。わたしがあなたと共にあおこなつて行おこなうことは恐おそるべきものである。

14 あなたはほかの神かみを拜おがんではならない。主しゅはその名なを熱情ねつじょうといい、熱情ねつじょうの神かみである。

旧約聖書を読んでいると、随所に感じられるのが神の恵みの圧倒性です。しかも神の恵みは神の自由の領域であつて、人間は神の恵みに圧倒されるだけで、それを議論したり、図式化し、予測したりすることは不可能なのです。また、契約という訳語で呼ばれているのは神の約束に基づく神と人との紐帯、つまり絆であつて、人間はこの絆の上にしつかりと立つて神の恵みに絶えず応答していくべき存在である、これが旧約聖書において人間に期待されていることです。

ところで、旧約聖書では神を形容するのに「熱情」という語がしばしば用いられます。ユダヤ人思想家のマルティン・ブーバーは、この「熱情」と訳されている語を非常に重視していますが、その重要性に気づいたのは十八世紀の東欧ハシディズムの創始者であつたバアル・シエム・トー

ヴのある言葉から稲妻のような閃きを得たからだ、と書いています。バアル・シエム・トーヴからヒントを得て彼がつかんだ「神の熱情」とは、人間の課題としての「神の似姿性」でした。つまりブーバーは、「神の熱情」が啓示の源泉であり、神の側から溢れ出て人間を圧倒する「熱情」の力によって人間は真の人間となり、真の自己に目覚め、立ち上がるのである、と考えたのです。

「神の熱情」は神の恵みの源泉であり、また真の人間としての在り方の源泉でもあります。神の熱情の啓示に触れた人間は、神の恵みに圧倒され、自分の生き方を問われることになります。そこにはもはや、神について論じ神を叙述する言葉は消失し、意味がなくなることになります。「主」という訳語で表されている神の聖なる名が宣言される時、「わたしは恵もうとする者を恵み、憐れもうとする者を憐れむ」（出三三章一四節）という神の自由の前に、人間はただ沈黙して立ち尽くすだけなのです。

「神の熱情」は神の圧倒的な恵みであると同時に、人間にとっては隠された領域であります。「神の熱情」に触れた人間は、神が「今、ここに」臨在していることを直感しますが、神の姿そのものを目にするには出来ません。シナイ山の麓に取り残されたイスラエルの民は、不安感から金の子牛を作り、可視的な形で神が共にあるという安心感を得ようとしています。それを知ったモーセは急遽下山し、怒って金の子牛を粉々にし、神に赦しを請います。啓示の奥義に触れることのない

い手軽な形で得られる神が共にいるという安心感は、人間を真の人間に目覚めさせることは出来ません。それは神ならぬもので神を代理させることで、それこそが旧約聖書において「偶像崇拜」と呼ばれているものなのです。

モーセの必死の執り成しに答えて神は、民と共に旅を続けることを承知します。出エジプト記三三章一四―一五節では神自身が同行するという言い方が繰り返されますが、どちらもヘブライ語原文では「顔が行くであろう」という表現です。神の「顔」とは神の臨在そのものであり、人間には目にするのできません。神の栄光が通り過ぎる時、モーセは岩の裂け目でそれをやり過ぎずしかありませんでした(二〇―二三節)。

「神の熱情」は、世界の向こう側から到来する事件であって、この世の何物によっても代用することのできないものです。「神の熱情」に触れた人間は、「インマヌエル」(神我らと共に)を実感し、神の恵みに答え、神の使命に生きようと立ち上がります。しかしそれでも人間は、迫り来る圧倒的な神の恵みに対して、口ごもりながら応答するほかありません。生きている限り人間は、神の恵みに十分には答えられず、失敗し、挫折してはやり直すしかない存在なのです。それでもなお神の「顔」を求め続ける生き方を、神は受け入れてくれるのではないのでしょうか。

クリスマスMASの喜びはなぜ？

大学宗教授主任 鐸 木 道 剛

ルカによる福音書 第二章一五～二〇節

15 天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。16 そして急いで行つて、マリアとヨセフ、また飼う葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。17 その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。18 聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った。19 しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。20 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

ディケンズの『クリスマス・キャロル』がまた映画化されたと聞きました。今度はチャールズ・ディケンズが『クリスマス・キャロル』を執筆した経緯を描いている映画だそうです。十二月初めにアメリカに出張したとき、ニューヨークのペンシルヴァニア駅の売店でパーパーバックの原作を見つけて買いました。アメリカでは十一月末から公開されているようですが、日本ではいつ見られるでしょうか？

しかしクリスマスはなぜ楽しいのでしょうか？もちろん救い主イエス様の誕生日だからです。それに聖ニコラウスの伝説に由来して、与えるにしろ、もらうにしろクリスマス・プレゼントがあります。それゆえ楽しいのでしょうか？

ぼくは二〇〇〇年のクリスマスに母を亡くしました。十七年前になります。癌で最後は食べられなくなり、それとともに急速に衰弱していきました。亡くなったのは十二月三十日の明け方です。ですから楽しいはずのクリスマス、一年で一番好きなクリスマスを、ホスピスの病院で母と出来るだけながく過ごしました。ぼくはお葬式の間ずっと涙を流していました。周りの人たちはぼくが感情に任せて最後に愁嘆場を見せることを心配（あるいは期待？）していたむきもあるのだらうとは思いますが、そんなものではありません。涙を流していたのは悲しみよりも感謝の気持ちでした。お葬式では幼なじみのオルガニストがモーツァルトのレクイエムからラクリモサを

弾いてくれました。母への感謝、そして十二月三十一日の大晦日にお別れに来てくださる方々への感謝の気持ちです。父のお葬式のときも同じラクリモサを弾いてくれました。この曲とともになら、ぼくも死ぬると思いました。しかしそのとき以来数年はクリスマスを楽しんでいることができませんでした。パウロが「我々は生きるも死ぬるも主のためである」（『ローマの信徒への手紙』十四章八節）と言っていることは知っています。しかしそういう気持ちにはなれませんでした。

クリスマスはイエス様の誕生日です。しかし実際のイエスの誕生日はわからなくなっています。イエスの肖像も失われました。なぜなら初代教会の時代、イエスはまず神であったことを証（あかし）することから始まったからです。公会議をみても、第一回のニケーア公会議での決定は、イエスと父なる神は同じ本質を持つ（ホモウーシオス、つまり本質あるいは存在であるウーシアを同じくする）ということです。イエスが人であると決めるのは、四五一年のカルケドンでの第四回の公会議になってからです。イエスは完全な人であり、同時にまた完全な神である、と決められました。決めることによって福音が理解されるようになるためです（つまり十一世紀のカンタベリーのアンセルムスの「理解するために信じる（credo ut intelligam）」）。その後しばらくは、イエスは神のみであって人ではなかったという単性論や仮現説が異端として排斥されま

す。そして七八七年の第七回で、ニケアでは二回目の公会議で、カルケドンの条項が再確認されます。

イエスは文字通りの人です。人であるなら誕生日があつたでしょう。肖像画だつて可能だつたでしょう。あつたはずということになります。イエスの誕生日とイエスの肖像画であるイコンはこうして可能、また言い方を変えると、必要となりました。

それで十二月二十五日です。その日にお祝いをするのは、ローマ時代に祝われていた冬至のお祭りであつたと聞きます。太陽が復活する喜びです。キリスト教はそれを受け継いだことになります。太陽の復活はなぜ喜びなのでしょうか？どうせ太陽だつて宇宙だつて消滅する空しいものです。そうと知つたとき、その喜びには意味がなくなります。また美しい自然はなぜ美しいのか。自然は、そして地球は消滅すると知つたときに、その美しさは意味がなくなります。美しいなんて感嘆しているのが空しくなります。

たしかに我々はそしてこの現実是被造物であり有限であり空しい。これは旧約聖書の教えです。コヘレトが「空しい、すべては空しい」（『コヘレトの言葉』第一章一節）と嘆く通りです。しかし神ご自身が、己を空しくして被造物の人になつてくださり（受肉すなわち無化…ケノーシス）、そして空しい現実が神と繋がつた（聖化…テオーシス）というのが、クリスマスの

喜びです。しかもその受肉は一回きりの出来事でした。仏教の本地垂迹のように常に起こっているわけではありません。一回きりだからこそ、この世の空しさに変わりはないのです。空しいけれども永遠と繋がっているそれがキリスト教です。もちろんクリスマスを楽しんでいるとき、そんなことまでは考えません。しかし教義をひもとけば、クリスマスの喜びには以上のような根拠があるのです。クリスマスは冬至の、太陽の再生の喜びに確固たる根拠を与えたとも言えるのです。

人々を救済する苦悩する神とのイメージについても同じです。和辻哲郎によれば日本でも室町時代にもそういう話はいろいろあったとのこと（『埋もれた日本』）。今から三十年前、昭和天皇ご崩御の前に連日ニュースの冒頭に、天皇の病状が報告されていたのを覚えています。だいたい職場から家に帰る途中で車のなかのラジオで聴いていました。天皇は今まさに病に苦しんでいらつしやると実感できました。天皇はやはり神なのではないかと一瞬思いました（といえれば面白いだろうと考えました）。人々のために十字架上で亡くなるキリストも神話学的パターンのひとつで、世界をみわたせば、他の宗教にもあるでしょう。しかしそれが現実に、そして一回きり起こったとするのがキリスト教です。キリスト教はほかにも様々な自然宗教の形を借りています。クリスマスに樅の木に飾り付けをするのも、ゲルマンの樹木信仰の名残りであるとよく言わ

れます。しかしキリスト教はそれらの自然宗教を成就したのです。トマス・アクイナス (Thomas Aquinas c.1225-74) が言うように「恩寵は自然を破壊せず、かえってこれを完成する (Gratia naturam non tollit, sed perficit)」のです。

イエス様の誕生はいつの季節であっても喜びです。しかし冬の日のクリスマスには世界の再生という本能的な喜びも重なっています。どうせ世界は消滅するなんていわれても、教義をさかのぼれば、イエス様の誕生ゆえに世界の再生を喜ぶ根拠がきちんと与えられているのです。果てしない神の愛、恩寵に感謝です。

ターゲット（目標）を外すな！

大学宗教授主任 原田浩司

フィリピの信徒への手紙 第三章一三～一四節

13 兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、14 神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目標指してひたすら走ることです。

二〇一八年最初の大学礼拝です。今年は、韓国の平昌で行われる冬季オリンピックやロシアで開催されるサッカーW杯など、四年に一度の世界的なスポーツの祭典があります。それにお正月の期間には、実業団駅伝や箱根駅伝、特に箱根駅伝では本学の定期戦のライバル校の青山学院大が総合四連覇を達成したことも、皆さんご存知でしょう。また高校・大学の日本一を決めるバレーボール、ラグビー、サッカーの全国大会も年始の期間の風物詩です。ですから、皆さんも年始の

休みの間にプロ・アマ問わず、スポーツの中継の二つ三つは見たのではないのでしょうか。

そこで、今日の聖書は、スポーツの話題で賑やかなこの時期、新年の最初の大学礼拝に相応しい箇所だと思えます。全国大会で優勝するといった経験をしたことのある人はごく一部です。優勝の陰には、目標に向かってひたすら懸命に走り続けた、見えない努力がどれほどあったか、と考えさせられます。「オリンピッククに出るぞ!」という子供のころからの目標に向かって頑張り続けたアスリートもいれば、同じ目標を掲げて努力したけれども出場が叶わなかったアスリートもいます。日本代表の座をつかむことや勝利を収めること。その背後にあったのが、彼らがぶれずに掲げ続けた「目標」でした。

そこで、今度は自分たち自身のこととして、二〇一八年を迎えた今、自分にとっての「目標」が何かを、今一度確認する時が大学礼拝の時ではないでしょうか。それは、学生の皆さんに限らず、誰にとつても、今、自分に目標があるかないかは、決して小さなことでありません。土樋キャンパスには三〜四年生ばかりですから、特に卒業を控えている四年生や、今春からいよいよ就職活動が本格化するのを身を引き締めている三年生など、皆さんそれぞれにとつて、自分が今どんな課題や目標を見据えているのか、見据えるべきなのか、といったこの時期特有のプレッシャーを感じている人も少なくないでしょう。大学生生活の後半期・終末期特有の、今この時期ならではの

の目標設定もそうですが、人生という長いスパンで、自分がどういう人生を送っていくのか、自分ほどのような大人になりたいか、社会人になりたいのか、どのような私になろうとしているのか、ということも真剣に考えないといけませんし、それもまた皆さんの将来の「目標」であると言えるでしょう。

さて、聖書はこの「目標」について、とても印象深いギリシア語で表現します。聖書に記される人間の罪、特にキリスト教では代表的な概念である「罪」。しかし、概念という抽象的なものでなく、一人ひとりの本性に具体的に具わる罪。この「罪」のことをギリシア語では「ハマルティア」という単語が使われます。「ハマルティア」という言葉を「罪」と日本語に訳しているのですが、「ハマルティア」という言葉のもともとの意味は「的外れ」です。「標的を外す、見失う」ということです。見据える「目標」を完全に見失った状態のことを指します。聖書が示しているのは、人間が外してしまったこの標的は何か、見失ってしまった目標とは何か、ということ。聖書はそれが「神」である、というのです。神という見据えるべき標的を無視すること、見失うことを、聖書は「罪」と呼ぶのです。

改めて、今朝のパウロの手紙の言葉を思い起こしましょう。「なすべきことはただ一つ、…目標を目指してひたすら走る」とあります。目標を見据えることの大切さが語られます。それ

は皆さん一人ひとりが人間として成長するために欠かせないものとして大切なことですが、同時に、「神を見失ってはなりません」という人生におけるもう一つの重要な課題を示していると言えます。私は私らしく生きたい。そして、自分が成りたい自分に成れたら、とても素晴らしいことです。けれども、人生には成功もあれば失敗もあります。勝利もあれば敗北もあります。合格もあれば不合格もあります。それが皆さんにとっての、この二〇一八年の一年でしょう。自分は何のため生きるのか、本当の自分を見出す、そしてその自分を見失わずに、その自分の目標を見失わない。そういうこともさることながら、聖書はさらに「神を見失ってはならない」ことを伝えます。

皆さんは、おそらく自分が考えている以上に尊い存在です。あなたはかけがえない、大切な存在です。あなたにかけがえない命を与え、唯一無二のかけがえのなさを与えているのは、他ならない神です。皆さんには、今年も、あれもこれもとやりたいことがあるかもしれませぬ。ですが「なすべきことはただ一つ」、オンリーワンです。聖書は、その大事な「オンリーワン」を伝えていきます。あれもこれも、ではなく、ただ一つ。かけがえのないただ一人の「オンリーワン」の皆さん。どうか、自分を見失うことなく、神を見失うことなく、この二〇一八年も、皆さんにとって、意義のある一年でありますように。若者らしく、前に全身を向け、あなたらしいオンリーワンの目標に向かって、今を精一杯走って、青春してください！

聖書とサイバーパンク

大学宗教主任 藤原 佐和子

ローマの信徒への手紙 第十二章十一節

「怠^{おこた}らず^{はす}励^{はげ}み、靈^{れい}に燃^もえて、主^{しゅ}に仕^{つか}えなさい。

皆さんにとって「大学」とは、未知なる世界であったと思います。新しい世界というのはいつでも刺激的で冒険的で、これまで知らなかった色々なことと出会う場所です。そのようにして私たちは日々、新しく作り変えられていくのだと思います。想像通りにいかないこともあるでしょうけれど、むしろ、大学生活で沢山の未知なるものと遭遇していくことそのものが、皆さんの世界を今まさに新たに構築している、更新している、アップデートしているのだと私は思います。そんな大小様々な変化に対していかにオープンでいられるかが、私たちの大学生活を学びと喜びの多いものにしてくれるのではないのでしょうか。というわけで、今日のテーマは「学ぶということ」

の意味です。

この春、公開された米国の映画に「ゴースト・イン・ザ・シェル」があります。これは、日本の漫画家士郎正宗がSFのサイバーパンク小説の傑作『ニューロマンサー』（ウィリアム・ギブソン著）から影響を受けて創作した作品（攻殻機動隊）を、ハリウッドが実写化したものです。その中に「電脳化」という概念が出てきます。人間の脳に直接、膨大な数のマイクロマシンを注入して神経細胞と結合、電気信号をやりとりさせて、脳と外部のネットワークを直接接続する技術のことを言います。一言で言えば、人間の脳を直接インターネットに接続するということです。

先ほど「ゴースト・イン・ザ・シェル」と聞いて、あとで調べてみようと思った方もおられると思いますが、もし皆さんが「電脳化」していたら今、私の話を座って聞いて下さりながら、同時に脳内で検索できます。寝る時、ベッドの中にスマホを持ち込まないと眠れない人も沢山います。でも電脳化したら、スマホはいりません。ただ、横になって目を閉じて、ネットの世界に意識ごと「ダブ」すればいいのです。そんなことができるとしたら、皆さんだったら何がしたいですか。

私周りには、会社からいきなりTOEICで六百点とりなさいと言われてうろたえている人がいますが、この人は真っ先に「英語をインストールしたい」と言いました。私がやってみたいのは、脳内のメモリの容量をめちゃくちゃに増やすことです。一回、勉強したことを確実に記憶できれば、

仕事が捗ることでしょう。一回話しただけの学生さんの名前と顔だつて、一発記憶。会議のスケジュールだつて、プライベートの約束だつて決して忘れません。

さて、作品世界では、保護者の同意があれば六歳から電脳化できます。病院の小児電脳科で手術を受けると、首の後ろに出入力インターフェースが埋め込まれますので、有線で情報をやりとりすることもできます。私は大教室での授業ではスライドを使うので、パソコンやコメントカードなどを持ってキャンパス内を移動するのがしんどいのですが、電脳化していれば、教室にあるプロジェクトのケーブルを首の後ろに挿し込むだけでいいのです。

そんな夢のような「電脳化」ですが、弱点もあります。例えば有線して、機密データを盗み取ることが可能です。有線だけではなく、今話題の身代金要求ウイルス WannaCity の元になった Windows の脆弱性、通称「エターナルブルー」(カッコいい名前ですね) をアメリカ国防総省 NSA から盗み出したハッカー集団「シャドーブローカーズ」が持っているような高度なハッキング技術を駆使すれば、私たちの電脳が知らないうちにハッキングされて、勝手に中身を閲覧されたり、情報が書き換えられたりすることだつてありうるのです。

そう考えると、電脳化されていない私たちは、いくら日々ネットに侵食されているとはいえ、それでもまだ「自由」なのかもしれません。心や脳の中の情報は、私たちだけのものです。思想

や信条も、私たちだけのものであって、誰からも勝手に盗まれたり、不当に書き換えられたりしません。知識も経験も、私たちのものです。

だとすれば、そもそも私たちが「学ぶ」という行為には、どのような意味があるのでしょいか。大学に入ったのはいいけれど、今ひとつ手応えがない。なんとなく日々を過ごしてしまうという声も聞かれます。そんなときは、「学ぶ」ということの意味を疑いたくもなるかもしれません。それに対して、私自身は「学ぶ」ということを根本的に良いものだと考えているので、正直なところ、学ぶことの意味について懐疑的になったことはあまりないのですけれども、現時点では、私には二つの答えがあります。一つは、社会人の視点からのざっくりした答え、もう一つは、今日の聖書箇所をヒントにしたクリスチャンの視点からのざっくりした答えです。

まず、ざっくりした答えの方ですが、私たちが学ぶのは、私たちが他人に簡単にコントロールされたり、意に反して支配されたり、不当に利用されたり、搾取されないためです。私たちの心や体は、私たちのものです。自分という存在の自由、自治、自立を守るために、教養や知識、批判的に考える力、絶えず学んでいく姿勢が必要なのです。

次にはつきりした答えの方ですが、聖書に「怠らずに励み、霊に燃えて、主に仕えなさい」とあるように、私たちが学ぶ意味は「主に仕えることにある」ということです。主とか神という言葉

葉が気に入らなければ、「人」でかまいません。人は神の作品ですから、人を大切にすることは、神を大切にすることに違いありません。人に仕えることなしに、神に仕えることなどできないのです。私たちが学ぶのは、「他者に仕えることができるようになるため」です。

面白いことに、クリスチャン的な考え方で、私たちが学ぶことによつて己をより高めようとするあらゆる努力は、己をより低くすることを目指すものなのです。さきほど、私たちの心や体はまず「私たちのものだ」と言いましたが、クリスチャン的な考えでは、私たちの存在は、究極的には神に帰属しています。だから、学ぶということも、単に「私」という人間の自己実現であるよりも、何らかの使命のために神から一時的にお預かりしている「私」という存在を、より良く用いようとする信仰の発露、あらわれであることが望ましいというわけです。

私が幼いころから育った教会では、「喜び仕える霊を与えて、私を支えてください」という詩篇の一節を旋律にのせて唱えます。喜んでお仕えできる私になりたい。でも、自力ではそうなれません。なので、喜んでお仕えできる者になれるように、私を日々新しく変えてくださいと神様に祈ります。

大学で学ぶことの意味は、実際にはもつと色々あると思います。おひとりおひとりがじっくり見つけていけるはずですが、クリスチャン的な考え方では「仕えるため」だということも、皆さ

んにとつてのヒントになることを願います。

模範とすべき方

大学宗教主任 吉田 新

ペトロの手紙一 第一章二三―一六節

¹³ だから、いつでも心を引き締め、身を慎んで、イエス・キリストが現れるときに与えられる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。無知であったころの欲望に引きずられることなく、従順な子となり、召し出してくださった聖なる方に倣って、あなたがた自身も生活のすべての面で聖なる者となりなさい。¹⁶ 「あなたがたは聖なる者となれ。わたしは聖なる者だからである」と書いてあるからです。

サッカーの試合を見ていると、ピッチを走り回る選手たちと共に審判員の動きも視界に入ります。審判員は公平さを重視し、時にヒートアップする選手をなだめ、試合の秩序を保つために大切な役割を担っています。勝つか負けるかの勝負に全力で望む選手たちのなかで、彼、彼女ら

と共に走りつつも距離を持つて客観視する審判は、いかなる時も冷静であることが求められます。しかし、それだけではありません。とりわけ、ワールドカップなどの国際試合をジャッチする審判員には複数の能力が必要とされます。まず「走力」です。サッカーの試合の主審は、一試合あたり約一から一三キロの距離を走るそうです。これは試合をする選手とあまり変わらない距離です。次に語学力です。国際試合の場合、英語だけではなく対戦する両国の言葉も頭に入れる必要があります。白熱する選手を落ち着かせ、なごませる言葉を審判は特に覚えるそうです。さらに大切なのは、正しいジャッチを下すために常にプレーの近くにいる必要があります。ボールを追いかけるだけではなく、選手と同じように試合の流れを予測する力、つまり先を読む力も求められます。トラブルが起きた時の人間力も審判には欠かせません。先程、述べましたように、審判は常に冷静で、安心できる存在であることが求められます。白熱する選手たちは審判の姿を見て、自身の冷静さを取り戻せます。審判員は選手たちに模範を示す存在であり、選手たちは審判員に倣って無事にプレーを進めることができるのです。

サッカーの試合における選手と審判員の関係から、先ほど、皆さんと共に読みました聖書の箇所を理解するためのヒントが与えられているように思えます。

本日の聖書箇所の一五節にこのような言葉があります。「召し出してくださった聖なる方に倣って、あなたがた自身も生活のすべての面で聖なる者となりなさい。」

皆さんにはこの人の姿に倣って、自分は生きていくという方はいらっしやいますか。ご両親、または大学や高校の先生方、友達、先輩、恋人、またはバイト先の店長でしょうか。私たちが冷静さを失った時、私たちには模範とすべき存在がいることを聖書は伝えます。「聖なる方」、つまり神が私たちの模範とすべき存在です。

では、「聖なる方」「聖なる者」とは何でしょうか。「聖なる」とは世俗的なものから「切り離す」「分離する」という意味が根本にあると考えられています。「聖なる方」「聖なるもの」とは他のものとは分けられた、違ったものということでしょう。「生活のすべての面で聖なるもの」「あらゆる行い、振舞いで聖なるもの」になるとは、「これまでとは違った生活、行い、振舞いをする、そのような生き方をする」という意味だと思います。

これまでとは違うとは何を意味するのでしょうか。この箇所の冒頭にありますように「心を引き締め、身を慎み」、「無知であったころの欲望に引きずられることない」生き方です。「身を慎み」とありますが、これは原文から直訳しますと「しらぶでいる」「酒に酔った状態ではない」という意味です。ここから転じて「まじめ」「勤勉」という意味にも受け取れます。この箇所は単に酒に

酔うなどということではなく、おそらく比喩的な意味が込められているでしょう。周囲の状況に飲みこまれず、一人、目覚めていなさいということだと思えます。その前にとでも印象的な言葉があります。「心を引き締め」です。直訳しますと「あなたがたの心の腰に帯を締め」なさいです。ただらだらした姿勢ではなく、背筋を正していなさいということです。

聖書を教育の中心に置く東北学院で学ぶ私たちは、聖なるものになること、つまり、これまでとは違った生き方を送ることが求められています。そのためにはどうするか。まず、身を慎むこと。つまり、しらふでいる、周囲の状況に飲みこまれず、一人、目覚めている。そして、心の腰に帯を締めること。背筋を伸ばし、生活しなさいと言われています。こう言いますと、私が最初に述べましたサツカーの審判のような存在に思えてきますね。

ヒートアップした選手が審判を見て、冷静さを取り戻せるように、私たちが生きていくなかで、大小の困難にぶつかって落ち込んだり、冷静さを失ったり、怒りに身を任せた時、私たちと共に動き、一緒に走り、私たちの生き方をよく観察してください。あつて生きることを学んでいきたいと思えます。

神の前に豊かになる生き方とは

総合人文学科長 出村 みや子

ルカによる福音書 第十二章一三〜二二節

13 群衆の一人が言った。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってくたさい。」 14 イエスはその人に言われた。「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」 15 そして、一同に言われた。「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によつてどうすることもできないからである。」 16 それから、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。金持ちは、『作物をしまっておく場所がない』と思いついたが、18 やがて言った。『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまし、19 こう自分に言つてやるのだ。』さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しむ』と。20 しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上

げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか」と言われた。21 自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」

勉強に読書にスポーツに、絶好の秋の季節となりました。本日お読みした聖書の箇所は、福音書に数多く記された主イエスの語られた譬え話のひとつで、学生時代に大学礼拝で初めて耳にした時に大変印象深く聞いた思い出があります。この譬えは、群衆の一人がイエスに対し、いわば兄弟間の遺産相続をめぐる争いを調停して欲しいと求めたのに対し、イエスがいったんこれを退けられた後に導入されています。このような内容の譬えです。ある金持ちの畑が豊作で、それらの収穫物をしまふ場所がないほどの沢山の収穫を得たので、今よりもっと大きな蔵に建て替え、今後は仕事を休みにして飲み食いし、楽しむと言った。この金持ちに対して神は、「愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した者は、いったい誰のものになるのか」と告げたという話です。皆さんは主イエスの語られたこの譬え話にどのような印象を受けられたでしょうか。

主イエスによってこの譬え話が語られた当の依頼者は、果たして貪欲な人だったのでしょうか。

聖書には何も記されていません。むしろこの人は、兄弟に遺産を独り占めされてしまい、気の毒な立場に置かれているように思われるので、なぜイエスがこの人の依頼を退けたのか、疑問に思う方も少なくないと思います。ここでこの短い譬え話が、一五節の「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい」という言葉と、二一節の「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ」という主イエスによる貪欲に対する二つの言葉の間に挟まれていること、さらにこれらの警告と譬えが調停を依頼した本人のみならず、その場に居合わせた一同に対しても語られていることに注意したいと思います。

結局主イエスは、この依頼者の求めに応じて遺産相続の調停をすることはありませんでしたが、この箇所から私たちは、この世の富と関わる際に留意すべき点が永遠の地平から、いわば問いとして投げかけられていることに気がきます。二〇節をご覧ください。神は「愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったい誰のものになるのか」と問いかけています。この神の問いかけを聞いてはっとした人は、昔も今も少くはなかったでしょう。この問いは永遠の地平から、私たちが日頃重大に深刻に考えているこの世の様々な営みや価値が、人間の思いのままになることの無い、命の有限さという厳粛な定めの前に、突如として色あせてしまうほどの衝撃をもつて語られているのです。

このメッセージが現代日本の文脈において重要であると思われるのは、富との適切な関わり方が欠如したところでは、神の似像 (imago Dei) として創造された人としての尊厳ある生き方が見失われてしまうのみならず、人と人との関係も崩れてしまうことを示しているからです。世界的規模で現在進行している途上国の貧困と飢餓の問題は、一部の先進国による富の独占と思いやりの無さが原因です。また今日では、金銭欲の犠牲となって職を失い、家庭崩壊を招いてしまう人や、他者の財産や、あるいは人命すら奪ってしまう事件は絶えないのです。

ここで旧約聖書の有名な族長物語に含まれたヨセフの物語（創世記三七―五〇章）に触れたいと思います。キリスト教学の授業でお聞きになった学生もおられると思いますが、ルカ福音書の譬え話の愚かな金持ちとは違い、ヨセフも豊作の時に巨大な倉庫を建てますが、それを人々の命の危機を救うことに役立てた人物として、また過去に憎み合った兄弟たちとの和解を果たした人物として旧約聖書に語られています。小さなころから自分の夢解きの才能を自慢にしていたヨセフは、とうとうお兄さんたちの妬みを受けてエジプト行き商隊に売られてしまいました。しかしヨセフは自らの夢占いの才能を活用してたくましくエジプト社会で生き延び、来たるべき飢饉の時を予告して、巨大な倉庫を建てることを王に進言して食料を備蓄させ、エジプトの食糧長官として民の危機を救うのです。近隣諸国からも食料を求めてやってきた人々の中に、かつてヨセフ

を売り渡した兄たちもいました。ヨセフはその兄たちとの数奇な巡り合わせに驚きながらも、兄弟たちの危機を救い、兄たちと心からの和解をするという物語です。過去のヨセフに対する仕打ちを悔いる兄たちに対して、ヨセフは「あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにして下さったのです」と優しく語りかけました。父祖ヨセフは、イエスの譬え話の金持ちとは違い、自分のために蔵を建てたのではありませんでした。むしろヨセフはその豊かな才能を人々のために活用することを徐々に学んで行った人でした。

このようにこの世との適切な関わりや貪欲への警告は、聖書全体が様々な形で告げているメッセージです。今日お読みしたルカ福音書のテクストの次に続く記事の末尾には「擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、盗人も近寄らず、虫も食ひ荒らさない。あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ」(一二章三三節)という言葉があり、また一六章三節にも「あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない」という主イエスの言葉がありますが、これらの言葉はその後の古代地中海世界における様々な禁欲主義運動や修道制の成立など、キリスト教の歴史に大きな影響を及ぼしました。

ここで五年前の国連の会議で行った演説で「世界一貧しい大統領」として注目を集め、今では

質素な農園暮らしを楽しんでいるウルグアイ前大統領のホセ・ムヒカ氏の言葉を紹介しましょう。

「私が思う貧しい人とは、限らない欲を持ち、いくらあっても満足しない人のことである」。

ムヒカ氏はインタビュにに応じて、人は物をお金で買った気であるが、実はその金を稼ぐために費やした人生という時間を買ったのだ。買い物と引き換えに人生の残り時間が目減りするなら元も子もない。その点で私は質素なだけで、貧しくはないのだ、と述べています。ワーク・バランスという言葉がありますが、何のための労働かを私たちに深く考えさせる言葉です。

もう一度ルカ福音書に戻りましょう。先ほどイエスに兄弟の遺産争いの調停を依頼した人は、主イエスのこの譬えをどのように受け取ったのでしょうか。その後、遺産を巡って争いをしていた兄弟とはうまく話し合いがついたのでしょうか。この人は主イエスとの一度限りの出会いを通して、その後に生き方がどのように変えられていったのでしょうか。秋の豊かな収穫の時を迎えるたびに、私はこの印象的な譬え話を通じて、神の前に豊かになる人間の生き方について色々と考えさせられるのです。

互いに愛するときに

経営学部教授 松村尚彦

ヨハネの第一の手紙 第四章十一～十二節

11 愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。12 いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内です。

先ほどお読みした聖書の最後の所には、とても面白いことが書いてありました。それは「いまだかつて神を見た者はいません。」「ということですよ。」

この言葉を聞いて、「へえ、見たこともない神様をどうやって信じるの」と思った方もいる

のではないでしょうか。実は私自身も神を見たことはありません。しかしクリスチャンとして神様を信じています。そこで今日は、神様を信じるとはどういうことか、あるいは神様を信じた時に、どんなことが起きるのかについて、具体的な例を交えながらお話ししてゆきたいと思います。

ところで日本語で「信じる」というと、一般的には「目に見えない、だから良くわからないことを、心の中で正しいことだと思い込むこと」だと考えられているのではないかと思います。

しかし新約聖書にある元のギリシャ語では、必ずしもそうした意味だけではないようです。ギリシャ語では、信じるとは、日本語で言う「信じる」という意味に加えて、「あたかも、そうであるかのようにやってみること」という意味があるそうです。これを聖書の文脈に即して言いかえれば、信じるとは「あたかも、そこに神の愛があるかのように思って、隣人に接してみること」だということになるでしょう。

そのように信じてみると、そこでは不思議なことが起こります。つまりあたかも、そこに神の愛があるかのように思って、人に接し続けていると、その相手の人も、あたかもそこに神の愛があるかのように私に接してくれるようになる。そして周りにいる多くの人も、その愛に感化されてだんだんと変えられてゆく。つまり私たちが互いに愛することができれば、愛という素晴らしい恵みは、どんどん増えて大きくなってゆくのです。

もう何年か前のことですが、テレビを見ていたら、たまたまそんな場面に出くわしたことがあったので、少しその話を紹介することにしましょう。

それは米国の女子ソフトボールでの決勝戦でのことでした。トーナメントを勝ち残ってきたオレゴン大学とワシントン大が、0対0で迎えた二回表、オレゴン大学のトホルスキーという選手がホームランを打った時のことです。

トホルスキー選手は、人生初のホームランだったために、喜び勇んで塁を回り始めたのですが、あまりに浮かれていたためか、一塁ベースを踏まなのまま、二塁に進んでしまいました。そのことに気付いた彼女は、あわてて一塁へ戻ろうとするのですが、その時、彼女は、無理に体を捻って、右足の靭帯を切ってしまったのです。

その場にうずくまって立てなくなったトホルスキー選手に、一塁コーチが駆け寄ろうとしますが、味方の選手の体に触ったらアウトになるというルールがあります。オレゴン大学の監督は、あわてて代走を出そうとするものの、主審からは「打者自身がホームを踏めない場合は、本塁打ではなくシングルヒットになる」と注意されます。

チームメイトが手助けをしたなら、ホームランは取り消されてアウトになってしまう。また、もし監督がピンチランナーを立てたなら、ホームランはシングルヒットになってしまう。そんな

困惑のなかで、監督、コーチ、審判たちが、立ち往生しながら、時間だけが経ってゆきました。

その時、対戦相手の一塁手であるホルトマンという選手が、塁審のところによつて来て、こんなことを言ったというのです。

「あの、彼女のチームメイトではなく、もし私たちが、彼女を運んだら、どうなりますか？」

この思いがけない問いに、塁審はあわててルールブックをチェックしますが、対戦相手の選手が走者を助けることを禁じるルールを見つけることはできなかつたそうです。そこでホルトマン選手は、もう一人の選手と協力して、ツルスキー選手を持ち上げて、各塁を踏ませてあげながら、一步一步慎重にゆっくりと進み、ホームベースまで運んでゆくことになったのです。その時、私が見ていたテレビの画面には、観客が総立ちで拍手をしているなか、二人の選手に抱えられて、ツルスキー選手がホームインする姿が写しだされていました。

私はこのテレビの画面を見ていたとき、私たちを超えたもの、何か「善良なるもの」としか呼ぶようなもの、そうしたものの働きによって、戦っていた2つのチームの選手たち、審判たち、そして観客までもが、結び付けられ、一体となる、そんな「とてもなく大きな愛」を経験している、そのように思えてとても感動させられました。

神様というと、もしかすると抵抗を感じる人がいるかも知れません。しかしこのように、何か

私たちを超えた「善良なるもの」の働きによって、人々が一体となって喜びを分かち合う経験をしているところには、人がそれを意識しているか、いないかは別として、そこには、いつも神様がおられるのだと思います。

だから神様は、何か目にみえるような姿かたちをもったものではありません。また知識や修行を積んで悟りを得なければ神様を知ることができないような、そんな私たちから遠く離れた存在でもありません。

そうではなく、今日の聖書の箇所が述べているのは、神様の本質は愛であり、私たちが身近な人と互いに愛し合うときに、神様はそこに留まり、さらに豊かに愛を育て増やしてくださいとうことです。

私たちも、そのことを信じて生きることでありたいと願っています。

誠の命にあずかるために

法学部教授 横田尚昌

マルコによる福音書 第九章四二節、四九〜五〇節

42 「わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がはるかによい。

49 人は皆、火で塩味を付けられる。50 塩は良いものである。だが、塩に塩気がなくなれば、あなたがたは何によって塩に味を付けるのか。自分自身の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ごしなさい。」

いまお読みしました聖書箇所のうち、まず着目したいのは四二節にある「つまずかせる」についてです。「つまずく」という言葉は、聖書によく出て来る重要な言葉の一つです。それは、人を

つまずかせる、人の信仰を失わせてしまう、あるいは人が神を信じて生きていくのを妨げてしまうという意味です。

では、その小さな者をつまずかせるのは、どのようなときでしょうか。これは、にわかには信じがたいことですが、信仰者の交わりの中で起るのです。信仰において強い者でありたいと願い、信仰者の中で人よりもより大きな者、立派な者でありたいと願っている人が、信仰に自信のない者、弱い者、小さな者をつまずかせてしまうのです。なぜなら、自分が強い者、大きな者、立派な者になろうとするとき、私たちは自分の周囲に、弱い者、小さな者を見出だしがちだからです。イエスの弟子たちも、そういう過ちに陥っていた時がありました。マルコ九・三三―三四に、「一行はカファルナウムに来た。家に着いてから、イエスは弟子たちに、『途中で何を議論していたのか』とお尋ねになった。彼らは黙っていた。途中でだれがいちばん偉いかと議論し合っていたからである」とあります。つまり、弟子たちは誰が一番強い者か、大きい者か、立派な者かと、互いを見て比較し合っていたのです。

もちろん、自分が強くて大きく立派な者でありたいと願うこと自体は、人間の当然の欲求であって責められるものではありません。問題は、その願いの達成度を、他人との比較において確かめようとするところにあります。すなわち、弟子たちは、自分より小さな者、弱い者を見出して相

対的に自分は大きくて強い者だと自分に言い聞かせている点が問題なのです。そのような状態の弟子たちが、キリスト教を伝道したらどうなるでしょうか。彼らは、小さな者、弱い者のみつけて、自分は彼らよりも大きくて強い、だから彼らにキリスト教を教えてやって救ってあげるんだ、と考えはしないでしょうか。そんな上から目線の伝道を受けた弱い者、小さな者が、つまずいてしまうのは必定でありましょう。

ただ、ここで残念なことは、弟子たちは、人をつまずかせようなどとは、これっぽっちも思ってもいない点です。むしろ彼らは、自分がより良い者、より信仰の深い者となって、人々により熱心に奉仕する者になろうと努力していたのです。でも、その姿勢がかえって人をつまずかせる結果となりました。なぜ、そのようなことになったのかといえば、信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することだとヘブライ一・一で述べられていることに尽きます。信仰なくして、不確定なことを確定的に確信することなど、人間の力だけではできないからです。だから、人は他人よりも優れていることでもって確信した気持ちになろうとしがちなのです。

いま述べた弟子たちも、おそらく伝道に自信がもてなかった、信仰がゆらいでいたからこそ互いに比較し合ったのでしょう。彼ら自身も信仰につまずいたのです。しかし、こうしたことは一般的にみても、我々の生活の中で往々にしてあることです。だとしたら、私たちはどうしたらよ

いのでしょうか。この点について、マルコ九・四九は、「人は皆、火で塩味をつけられた者として生きなさい」と教えます。また、コロサイ四・六には、「いつも、塩で味付けされた快い言葉で語りなさい」という教えがあります。ここに「快い」とは、原文では「恵みにおける」という意味だそうです。したがって、塩で味付けされた言葉とは、神からの恵みにおける言葉という意味になります。

それでは、神からの恵みとは、いったい何でしょうか。それは、マルコ九・四九の「火」の意味をたずねることによって明らかになります。すなわち、この「火」とは、自分では償い得ない重い罪を犯した私たちに対する神の裁きの火、地獄の火のことを指すそうです。したがって、本来であれば私たちはこの火によって焼かれてしまうはずだったのです。ところが、そうなる前に神は一人子主イエス・キリストを地上にお遣しになりました。そして主イエスは、私たちに代つてその裁き火、地獄の火をお受けになりました。すなわち、私たち自身では償うことのできない重い罪に対する神の裁きを、主イエスは引き受けて下さり、しかも、そこから復活されたのです。十字架の死と復活による贖いです。これが神からの恵みであり、この恵みを神から授かるということが、すなわち「火で塩味を付けられる」ことの意味となります。かくして、私たちは、その恵みによって罪許され、義とみなされて再び神とのふさわしい関係が回復されました。主イエス・

キリストによるこの救いを受け、神の恵みの塩味を付けられた私たちは、もはや、自分の働き、業績、立派な奉仕などによって自分の人生を味付けしなくてもよいのです。人との相対的な関係の中で自分の価値を確認しなくてもよいのです。主イエス・キリストによって与えられている神の救いの恵みが、しっかりと私たちを捉えているからです。そのことを信じるだけでよいのです。そして、自分にどんな力があるか、どんな立派な奉仕ができるか、などということに依り頼むのはやめて、神の御手に身を委ねればよい。なぜなら、神は、その一人子主イエス・キリストの十字架の死と復活によって、私たちの犯した重い罪から贖いだしてくださったからです。それほどまでに、神は私たちのことを愛し、慈しみ続けてくださっているのです。

そのような神が、私たちに益とならない、ためにならないことを用意しておられるはずがありません。このことを覚えて、困難な課題にひたすら真摯に取り組む姿勢を貫けば、どんなに小さくて弱い者でも、所期の成果が得られると確信して良いのではないのでしょうか。たとえ、失敗に終わったなど思えるときでも、その失敗の経験から少しでも多くを学ぼうとする姿勢があれば、神は、きっとそこに大きな収穫を用意してくださいます。でも、自分を大きく見せようとして、自分は人より強いと思ひ込んでいたり、そのような収穫が得られるはずがありません。なぜなら、自分の失敗に対する人々の視線が気になって、取り繕いに走ってしまうからで

す。取り繕えば、失敗から学ぶ機会は失せてしまうのです。これに対して、弱い者、小さな者は、小さくて弱いからこそ、身の丈をわきまえた真摯な努力をします。失敗を受け入れ、必死で改善していくことでしょう。そして、戦いを好まず、平和に暮らそうとします。そこでは、自分が生かされていることへの感謝を忘れません。それゆえ、自ずと塩で味付けされた快い言葉で語るこ
とになります。かくして、まことの命にあずかる道がひらかれるのです。

お祈りをいたします——

主の顕現

工学部准教授 長 島 慎 二

マタイによる福音書 第二章一〜十二節

1 イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、2 言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」3 これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。4 王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。5 彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

6 『ユダの地、ベツレヘムよ、

お前はユダの指導者たちの中で

決していちばん小さいものではない。

お前から指導者が現れ、

わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』

7そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。
8そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。9彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。10学者たちはその星を見て喜びにあふれた。11家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。12ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

新年おめでとうございます。今年度の旭ヶ岡寄宿舎における夕礼拝は、今日が最後となります。共にみ言葉に学ぶことができたことを神様に感謝します。教会では、いま顕現節の季節を迎えています。顕現節は一月六日の顕現日以降、四旬節の前の季節です。顕現というのは、はっきりと

現れることを意味しています。教会では神の子が現れたことを意味しています。

わたしが通っている教会では、この季節のはじめの日曜日はマタイによる福音書二章一節以下、占星術の学者たちがベツレヘムでお生まれになった主キリストのもとを訪れる箇所を読みます。ここに登場するヘロデ王というのは、紀元前七十三年頃から紀元前四年までユダヤの王となったヘロデ大王のことです。キリストが十字架に架かったときに登場するガリラヤの領主ヘロデは、その息子であるヘロデ・アンティパスです。

ヘロデ大王は、エルサレムで第二神殿とよばれる大規模な神殿再建を行ったことで知られています。その神殿も、西暦七十年のローマによるエルサレム陥落と同時に破壊され、今は、ニューズでも登場する嘆きの壁と呼ばれる部分を残すのみです。

一方で、ヘロデ大王は猜疑心の強い人で、奥さんや息子までも処刑しています。まさしく、わたしたちの国の隣国の指導者のようです。キリストは、民主的で豊かな国に生まれたのではなく、ありません。王自らが親族を殺してしまうような、恐怖が支配しているようなところに生まれたのです。むしろ、そうしたところに、主が来られた意味を知るので。

さて、キリストの顕現といっても、聖書に記された記事が伝えるのは、占星術の学者たちを通してのものであります。

「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」

という記事です。占星術は東方で生まれたものと考えられています。基本的には占いか霊媒といったものはユダヤ教では禁止されていて、占星術の学者たちはペルシャ周辺から旅をしてきた人たちであったのです。すなわち、彼らは異邦人であるのです。主がユダヤ人に限らず、世界の全ての救いのために生まれたことを示しているように思います。むしろ、長い間救い主の来ることを待っていたはずの多くのイスラエルの人たちは主の降誕に気付くことなく、異邦人であった占星術の学者たちや、一部の羊飼いたちが気付いたのでした。

とはいえ、占星術の学者たちは、救い主を探すために、まず、ヘロデ大王のもとを訪ねています。ですから、ヘロデ大王をはじめとして、祭司長たちや律法学者たちも、占星術の学者たちの不思議な体験を聞いたのです。すなわち、イスラエルの主だった人々が、救い主が生まれたというしるしに接したのです。それにもかかわらず、彼らの誰一人として、救い主のもとにはせ参じた者は無かったことを聖書は伝えるのです。

そのときのヘロデ大王の心情について、聖書は「不安を抱いた」と記しています。祭司長たちや律法学者たちも同じであったのではないのでしょうか。一方で、占星術の学者たちは、東方で見

た星が先立つて進み、ついに幼子のいる場所の上に止まったのを見て、喜びにあふれたのです。はたして、家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられました。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げたとあります。黄金、乳香、没薬は、占星術の道具であつただろうという話もあります。そう、彼らは、喜びにあふれて、自分を明け渡していったのです。

絶大な権力を手にしながら、家族をも殺すほどの猜疑心に悩まされたヘロデ大王も、神殿に固執した祭司長たちも、律法の書に通じていた律法学者たちも、自分を明け渡すことができず、ベツレヘムに向かうことすらできなかったのです。この顕現の季節において、わたしたちひとりひとりが、主の顕現において喜びにあふれているでしょうか。むしろ、この世的な権力や立場、地位、お金、健康といったものを救い主よりも第一にしているのではないのでしょうか。そうしたときに、わたしたちも、救い主の顕現に不安を覚えることでしょうか。なによりも、主の顕現が沸き上がる喜びなのであることを確認して、この新しい一年を過ごしたいと思うのです。

ある日の音楽礼拝

大学オルガニスト 今井 奈緒子

六月二十六日(月) 土樋ラーハウス記念礼拝堂 司会 野村 信宗教部長

七月十二日(水) 多賀城礼拝堂 司会 北 博 大学宗教主任

〔前 奏〕 J. G. ヴァルター (二六八四〜一七四八) タリエッティ氏のコンチエルトより第1・2楽章

〔讚美歌〕 (土樋) 第二編161番 (多賀城) 75番第一節

〔聖書箇所〕 (土樋) 詩編 第三六篇 六〜一〇節 (多賀城) 詩編第一五〇篇一〜六節

〔讚美歌をうたおう〕 讚美歌21 223番第1、2、4、7節

〔オルガン演奏〕 J. プラームス (一八三三〜九七) コラール前奏曲「わたしは心より喜ぶ」

〔主の祈り〕

〔頌 栄〕 544

〔後 奏〕 J. G. ヴァルター タリエッティ氏のコンチエルトより第4楽章

梅雨を過ぎれば、輝くばかりの夏がやって来ます。創造主なる神に思いを馳せて讚美歌をうたい、オルガン曲を聴きましょう。讚美歌21223番（讚美歌75番）の歌詞は、十二世紀から十三世紀を生きたアッシジの聖フランチェスコによる「太陽の賛歌」に拠っています。十七世紀にこの旋律と合わされてコラル（ドイツ語の賛美歌）となりました。

ブラームスは、作曲者不明の十六世紀成立のコラル「わたしは心から喜ぶ」に味わい深い編曲を施しました。ヨハネス・ヴァルターによる詞は「わたしは心より喜ぶ愛すべき夏の季節を神がすべてを新しく永遠に美しくされるこの時を。神が天と地とを新しく創造されて、すべての創造物がかくも見事に、愛らしく、澄みきっていると！」（今井訳）と歌います。

ヴァルターは『音楽辞典』を著し、ヴァイマルで親戚筋のバッハと共に働きました。多くのコラル編曲でも知られています。

七月二十六日（水） 泉礼拝堂 司会 阿久戸義愛 大学宗教主任

〔前 奏〕 W. ボイス（一七二〇〜七九）ヴォランタリー組曲ハ長調

〔讚美歌〕 546番

〔聖書箇所〕詩編 第九六篇 一〜三節

〔オルガン演奏〕 G. コレット (ca. 一六七〇〜一七三三)

《第八旋法のミサ》より「ヴォワ・ユメーヌの対話」

W. ボイス トランペット・ヴォランタリー 二長調

〔主の祈り〕

〔頌 栄〕 541

☆リード管の響き

オルガンのパイプは、概して発音の仕組みの異なる「フルー管」と「リード管」の二種類に大別されます。ここ泉キャンパス礼拝堂のオルガンの正面に見えている、整然と並んだパイプ群は「フルー管」の仲間で、その後方には他のさまざま形状のフルー管たちに加えて、豊かなキャラクターを持ったリード管たちが控えています。フランス・ケルン社製のこのオルガンには、リード管の仲間が第一手鍵盤に4列、第二手鍵盤に2列、第三手鍵盤に3列、そしてペダル鍵盤に4列、計13列（種類）も備わっています。今朝の礼拝では、これらリード管の中から、性格の異なる二種類の音色を紹介しましょう。

コレットは、泉礼拝堂オルガンの故郷フランスの作曲家。ヴォワ・ユメーヌ Vox Humaine は「人間の声」という名前を持つ音色です。確かに、このような独特の声音こわねを持った人も居ますよね？ 対照的な、フルー管のやさしい響きとかけ合う曲です。

ボイスは英国国教会の作曲家です。金管楽器トランペットの音をまねて作られている、オルガンの「トランペット」管が活躍する曲を聴いてください。前奏も、ボイス作曲のヴォランタリー（英国国教会の礼拝で用いられてきた奏楽曲）、そして後奏ではリード管を用いず、フルー管の仲間を沢山組み合わせた賑やかな行進曲で、皆さんを送り出します。

一月二日（木） 泉礼拝堂 司会 中川郁太郎 宗教音楽研究所特任准教授

〔前 奏〕M. プレトリウス（二五七—二七—一六二二）コラール・ファンタジー「神はわが堅き砦」

〔讚美歌〕讚美歌 21 575番「球根の中には」（プリント参照）

〔聖書箇所〕ヨハネによる福音書第一六章一二節

〔オルガン演奏〕 H. イザーク（一五二七没）／アメルバッハ編曲「インスブルックよ、さらば」

J. S. バッハ（一六八五—一七五〇）

「ラール唱」誰があなたをかくも打ち据えたのか？」 BWV244/37

「ラール編曲」起きよ、と呼ばわる物見らの声」 BWV645

〔主の祈り〕

〔讚美歌〕 544

〔後 奏〕 J. S. バッハ「喜びと平安もてわれは逝く」 BWV616

☆ 讚美歌を歌う

一〇月三十一日の、500年目のルター宗教改革記念日については、大学礼拝の説教と讚美、それに基づいた前奏・後奏の曲で繰り返し耳にし、皆さん理解を深められたことと思います。今日の前奏はルターのコーラル「神はわが堅き砦」による、プレトリウスの編曲です。

『讚美歌2』は一九九七年に、日本キリスト教団讚美歌委員会から出版されました。その中から「球根の中には」を歌いましょう。アメリカの音楽家ナタリー・スリース（一九三〇〜九二）が作詞作曲したこの讚美歌は、フォークソングのような親しみやすさを持ち、3節のはじめにある「いのちの終わりは、いのちの始め」をキーワードとして、心に響いてきます。最近は大学礼

拝でも良く歌われているようです。

コラールはドイツ語の讚美歌ですが、その素材となつたのは、古くから歌われてきたラテン語聖歌や、ドイツ語による世俗歌曲でした。当時の民衆によく知られ歌われていた旋律が、コラールに生まれ変わった例を、中川先生の歌でお聴きください。

宗教改革によつて生まれたプロテスタント信仰は、キリストを信じる者には「死」を越えた永遠の「生」があることを、そして親しい家族や友人たちと、神の御国でふたたび会うことができるといふ「未知の喜び」を教えています。次の日曜日十一月五日、多くのキリスト教会では召天者を記念する礼拝を守ります。バッハのオルガン曲「起きよ、と呼ばわる物見らの声」は、一六世紀の末、ペストの大流行で全人口の三分の一を失つたドイツの町、ウンナの牧師であつたフィリップ・ニコライが作詞作曲したコラールの編曲です。この歌によつて人々に、天国に希望があることを力強く説いたのです。後奏には、召天者を覚えるこの月にちなんで「シメオンの賛歌」をテキストとする死と永世のコラール「喜びと平安もてわれは逝く」を弾きます。

〔前 奏〕 H. シャイデマン (G. 一五九六～一六六三) 第8旋法によるマニフィカトより第1・2節

〔讚美歌〕 95

〔聖書箇所〕 イザヤ書 三十五章第1～4節

〔オルガン演奏〕 M. ヴェックマン (一六二二～七四) 第2旋法によるマニフィカトより第1～3節

〔主の祈り〕

〔讚美歌〕 540

〔後 奏〕 M. ヴェックマン 第2旋法によるマニフィカトより第4節

アドヴェント(待降節)第一週を迎えました。皆さんと歌うはじめの讚美歌95番には、「マリアの賛歌」に一九世紀のメロディをつけたものが選ばれています。マリアの賛歌とは、天使ガブリエルから受胎告知を受けたマリアが当惑のあまり、洗礼者ヨハネを身ごもっていたエリサベトのもとを訪れた際に、神のなさる不思議な^{わざ}業を悟り神を讚えた言葉で、ルカによる福音書第一章46～55節に記されています。このテキストに旋律がつけられて聖歌となり、九世紀頃からローマ・カトリック教会で盛んに歌われてきました。宗教改革後は「Meine Seele erhebt den

Herrn わが心、主をあがめ」のコーラルともなりました。J. S. バッハの出現を待つまでもなく、教会の音楽家達は旧教新教を問わずこぞって、この旋律「私の霊は救い主である神を喜び讃えます。」に編曲を施して歌い、オルガンで演奏しました。マニフィカトの旋律は、(教会) 旋法の違いによって微妙に異なっています。一六〇一七世紀、北ドイツに花開いたオルガン楽派の強力な担い手、シャイデマンとヴェックマンの作品でお聞きください。

人生を変える秘訣

教養学部准教授 大澤 史 伸

ガラテヤの信徒への手紙 六章九節

「たゆまず善ぜんを行おこないましょう。飽あきずに励はげんでいれば、時ときが来きて、実みを刈かり取とることになります。

みなさんは、こんにちは、私は大澤史伸と言います。現在、教養学部地域構想学科の教員をしています。大学では、「社会福祉概論」や「福祉サービズ論」などを教えています。どうぞよろしくお願いします。

みなさんは、箱根駅伝を見ただでしょうか？ 私たちの東北学院大学とも関係の深い、青山学院大学が箱根駅伝で三連覇を達成しました。その青山学院大学の原晋（はらすすむ）監督は、現在、

マスコミでも引つ張りだこです。原晋は、広島県出身で、世羅高校から中京大学に進学し三年時に日本インカレ五千メートル三位。中国電力に入社し一九九三年には主将として全日本実業団駅伝初出場に貢献しました。

しかし故障が原因で入社五年目の二七歳で選手生活を引退、十年間、中国電力でサラリーマン生活を送りました。その後、二〇〇四年に青山学院大学陸上競技部監督に就任します。当初は「青山学院大学の陸上部は箱根駅伝に出ていない」との理由で断られ選手のスカウトに苦労をしたり、チーム自体も廃部寸前になったこともありましたが、原監督の地道な指導が実を結び、二〇一六年の出雲駅伝で二年連続三回目の優勝を皮切りに、二〇一六年全日本大学駅伝優勝、二〇一七年第九三回箱根駅伝で三年連続優勝と「大学駅伝三冠」を達成しました。

原晋監督のこれまでの人生は、必ずしも順調であったわけではありません。本人は、選手としての箱根駅伝の出場経験はなく、実業団での選手生命も怪我のため、わずか五年で終わっています。彼はそれにも負けず、地道な努力を重ねて、ようやく実を結んだといえます。今日の聖書の言葉にも人生に勝利をするための秘訣が書かれています。共に聖書の言葉を学んでいきましょう。

私たちが人生に勝利するためにしなくてはならないことは、

① 社会や他の人のために良きことを行うこと

六章九節には、「たゆまず善を行いましよ。」とあります。七節には、「人は、自分の蒔いたものを、また刈り取ることになるのです。」次の八節には、「自分の肉に蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、霊に蒔く者は、霊から永遠の命を刈り取ります。」これらの言葉はどういうことかと言うと、「自分のためにではなく、社会の為、他の人々のために良きことをしましよ」ということになります。そういう人の人生を神様は祝福して下さると言っているのです。

神様という言葉が好きでないのなら、みんなだって、自分勝手なことばかりしている人は好きじゃないでしょう？自分勝手なことばかりしている人は最終的には人々からもいつか嫌われてしまいます。反対に、社会の為、人のために頑張っている人は最初はしんどいかもしれないけれど、そういう人の周りにはいつか多くの人々が集まってきてその人を助けてくれるのです。社会や他の人のために良きことを行うことが私たち自身の人生を祝福するための一つ目のポイントになります。

②あきらめないで続けること

九節には、「飽きずに励んでいれば」とあります。皆さんの中には、今までの人生の中で、良いことをしても時にはそのことに飽きてしまったり、励まなくなり、最終的にはやめてしまったりしたことはなかったでしょうか？

ある人は、社会や人のために良いと思ったことをしても、こんなことをしても無駄だと思ったり、誰からも評価をされず孤独になってしまったりして気持ちが悪くなってしまえば、やめてしまうのです。

でも、今日の聖書の言葉には、はっきりと書いてあります。「飽きずに励んでいるならば」必ず事は良き方向に変わっていくと。皆さんはどう思いますか？「私には絶対に無理だ。」と思ってしまういますか、誰だつてはじめは何もできないし、上手くはいかないものです。「上手くいくためには、上手くいくまでやめないこと」です。「あきらめないで、続けること」「飽きずに励むときにあなたの人生は変えられるのです。これが二つ目のポイントになります。

③チャンスを見逃さないこと

次に、聖書には、「時が来て、実を刈り取ることになります。」と書いてあります。ここで注意しなくてはならないことは、「すぐに」とか、「自分が良いと思った時に」とは書いていないのです。

ただ「時が来て」としか書かれていないのです。つまり、その時がいつ来るのかは私たちには分からないということです。

だから、「時が来た時に」しつかりとその時、チャンスを見逃さないことが大切になるのです。ここに、難しさがあります。社会や他の人のために何をこつこつしたとしても、いつ結果が出るのか分からないことは誰にとつても辛いことだと思えます。ある人は、良いチャンスに巡り合ったとしてもそのチャンスが分からない、あるいは、チャンスをものにできない人が多いのです。チャンスが過ぎ去ってからあの時がチャンスだったと言つても遅いのです。

あなたが今、していることは必ず時が来たら、結果が出るのです。そのことを信じて、チャンスを見逃さないことが大切になってくるのです。

(結論)

最後に、こんな話をして終わりたいと思います。

一九七七年のアメリカ映画で「ジョーイ」という作品があります。これは実際にあった話を元にして作られました。ペンシルバニア大学のアメフト選手ジョンキャパレッティは、平凡な学生生活を送っていました。しかし、ある時、11歳の弟のジョーイが白血病と診断されます。

兄のジョンは病気の弟ジョーイのために何かをしたいと考えます。弟ジョーイは兄のジョンに答えます。「次のアメフトの試合でタッチダウンを4回して欲しい」タッチダウンは野球で言うならばホームラン、サッカーならばゴールを決めることです。しかし、一人でタッチダウンを4回とはほとんど無理なお願いです。

しかし、兄のジョンは白血病のジョーイの願いをかなえるために、タッチダウンを4回します。それ以後も、ジョーイの願いをかなえるためにタッチダウンをしまくるのです。最終的には、二六三九ヤード二九のタッチダウンの記録を残し、一九七三年度の最優秀選手としてハインスマン・トロフィー受賞者になりました。

ジョンキャパレティーは自分のためにアメフトをしていた時には、レギュラーになるか、ならないかというようなく平凡な選手でしたが、①白血病の弟のジョーイのために、②あきらめないで努力を続け、そして、③最終的には、最優秀選手に選ばれるまでになったのです。

私たちも、今日の聖書の言葉のように、①社会や他の人のために良きことを行うこと、②あきらめないで続けること、③チャンスを見逃さないこと、を通してこの二〇一七年度を歩んでいきましょう。

十一月六日(月) 音楽礼拝(土樋キャンパス)

宗教音楽研究所特任准教授

中川 郁太郎

司式および独唱 中川 郁太郎 (宗教音楽研究所特任准教授)

奏楽 今井奈緒子 (教養学部教授)

〔前 奏〕

〔讃美歌〕 八五番 (一、二節)

〔聖書箇所〕 列王記上 第十九章 八〜十節

シヨートメッセージ

十一月九日は、ベルリンの壁崩壊の記念日ですが、私が留学していた、ベルリンの南二百キロほどの位置にある街ライプツィヒではこの日に「光の祭り」を祝います。一九八九年の十月、当

時は東ドイツであつたライプツィヒの中心部にあるニコライ教会で、月曜日毎におこなわれていた祈禱会が大規模な反政府デモへと発展し、一か月後のベルリンの壁崩壊に繋がりました。このことを記念する「光の祭り」では、市の中心部のアウグストウス広場が、集う人々の口ウソクの光で満たされるのです。あの美しい光景は今も記憶に残っています。しかし一方で「この日を祝うなんて信じられない」と苦い顔をしていた友人（彼は神学生でした）のことを、私は忘れることができません。

ベルリンの壁崩壊より五十一年前、一九三八年の十一月九日は「水晶の夜」という、やはりドイツ全土を巻き込んだ事件がおこった日でした。パリのドイツ大使館職員が一人のユダヤ人青年に殺害されたことに対する「市民の自発的な抗議行動」という名目で時のナチス・ドイツ政権が演出した、大規模なユダヤ人迫害行動です。多くの生命と財産が失われました。破壊されたユダヤ人の住居や商店、シナゴークと呼ばれるユダヤ教会などの窓ガラスが飛び散り、街灯に照り映えて輝きました。これが「水晶の夜」という一見美しい呼称の由来です。この日の出来事を「なかったこと」として、自分たちの国が再び一つになったことだけを無邪気に祝うのか、と友人は問うたのです。

歴史から私たちはなにを学ぶべきでしょうか。そして神の言葉を取りつくし礼拝という場におい

て、歴史の中の人間の「罪」を、私たちはどう捉えるべきでしょうか。「人間はどうしようもない、人間の歴史に進歩などあり得ない」と言つて、明日への歩みを止めるべきでしょうか？あるいは「神ならぬ人間のすることなのだから、過ちが起こることは避けられない。人間がそれを突き詰めて考えてもしょうがないではないか」と言つて、思考停止、判断停止に陥るべきでしょうか？この短いメッセージのなかで答えは出せません。たしかなことは、私がかつて学んだドイツという国には、過去の「罪」を見つめながら、なお神に向かつて明日を生きようとしている人々がいるということ。 「戦後から戦前に大きく転換しようとしている」と言われる現在、インターネットを中心とする「顔の見えないコミュニケーション」が主流となる中で、過去の歴史やその中にある人間の過ちから、意識的に顔を背けようとする人々がいることも事実です。そのような時代に生きる私たちにとつても、このことは考えてみるべき問題ではないでしょうか。

これから演奏する曲は、お手元のプリントの解説にありますように、北イスラエルの王アハブとその妃イゼベルの迫害を受けて荒野に逃れた預言者エリヤを天使が励ます歌ですが、この作曲者メンデルスゾーンはユダヤ人でしたので、先ほどお話しした「水晶の夜」の時代、つまりナチス時代のドイツでは、この音楽は演奏が禁止されておりました。取り返しのつかない罪を見つめつつ、なお神に向かつて祈る、ということについて考えながら、本日はお聴きください。

〔独 唱〕 讚美歌第二編 二〇八番 「主の前に黙して耐え」

(メンデルスゾーン作曲 オラトリオ《エリヤ》より)

〔祈 禱〕

〔讚 美 歌〕 八五番 (三、四節)

〔後 奏〕

literary talent, Whittier knew little about hymn singing. This was probably due to the fact that Quakers of that time did not have singing in their worship services. As Whittier himself commented regretfully, “two hundred years of silence ha[d] taken all the sing out of the Quakers.” Indeed, unlike some other Quakers, Whittier had come to appreciate good hymns and their use as effective literary and spiritual mediums. He said, “A good hymn is the best use to which poetry can be devoted, though I do not claim to have succeeded in writing one.” Whittier did not write words specifically for hymns. However, editors have produced several hymns by putting excerpts of Whittier’s poems to music. No other American poet has had more poems used for hymns than Whittier has.

John Greenleaf Whittier died in 1892 and was buried in New Hampshire. The funeral was a simple, Quaker ceremony. It has been said that Whittier “left upon our literature the stamp of genius and upon our religion the touch of sanity.” It is my prayer that Whittier’s simply expressed faith will encourage each of us to follow Christ and to show God’s love to those around us, in simple and sincere ways.

education. He grew up in a rural home in New England, and his family was very poor.

Whittier's poverty, however, did not diminish his literary talents. When he was very young, he began to write poetry. At one point, his sister sent one of his poems to William Lloyd Garrison, the editor of a weekly publication called *Free Press*. Garrison was so impressed by Whittier's poems that he encouraged the young poet to begin preparing to become a journalist. Thus, after a two-year course in journalism at the Haverhill Academy, Whittier began to work as a journalist. His work took him to several major American cities. Both his popularity and influence began to increase. Eventually, he was even elected to the Massachusetts legislature. Later on, he became the editor of a publication called the Pennsylvania Freeman and even developed a relationship with the famous magazine, *The Atlantic Monthly*. With the publication of his poem, *Snowbound*, Whittier became a well-known and established American writer.

In spite of his success, however, Whittier did not give up his simple, Quaker ways. He continued to think, speak, and dress like the Quakers among whom he was raised. He even continued to speak in the same, older English dialect that was used by the Quakers, using the word "thee" instead of "you," for example.

It is interesting to note that, though he was a monumental

of Mankind”) were written by John Greenleaf Whittier, one of America’s greatest poets. Whittier lived in America during the nineteenth century. He was part of a group of Christians called “Quakers.” Quakers believed that we should approach God and worship God simply and sincerely.

In nineteenth century America, many Christians gathered together at “revival” meetings where people often participated in highly emotional activities through which they worshiped and expressed their love for God. Quakers, however, rejected such highly emotional ways of worshiping God; they preferred to express their worship more quietly. When Whittier worshiped with his Quaker brothers and sisters, they did so sincerely, but quietly. There was no pomp, no ritual, nor any highly emotional expressions of personal feeling in their worship services. As Whittier explained, our belief in God is reflected in the way we use the life we have received from God. To believe in God is to love other people. As Whittier said, “O brother man! Fold to thy breast thy brother. To worship rightly is to love each other, each smile a hymn, each kindly deed a prayer.”

Whittier was a great author. He ranks with other American literary figures of his time, writers like Ralph Waldo Emerson, Henry Wadsworth Longfellow, James Russell Lowell, and Oliver Wendell Holmes. It is interesting however that, unlike probably all of us here today, Whittier was not able to obtain a college

“Quiet and Thoughtful Worship”

大学名誉教授 David Murchie

(マーチー デイビッド)

SCRIPTURE READING : Isaiah 30:15 (イザヤ書30章15節)

This is what the Sovereign Lord, the Holy One of Israel, says: "In repentance and rest is your salvation, in quietness and trust is your strength...."

(訳) まことに、イスラエルの聖なる方 わが主なる神は、こう言われた。「お前たちは、立ち帰って 静かにしているならば 救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある」と。

The *music* of today's hymn was composed by Frederick C. Maker, an accomplished Irish musician. Maker was an international person. He lived and traveled in many different countries. He became well-known for giving performances in areas where many of the people were poor. He was known for accepting any kind of support people gave him. One time he received 100 sheep and several chickens as payment for his concert. Maker also composed the music for the famous hymn, "Beneath the Cross of Jesus."

The *words* of our hymn for today ("Dear Lord and Father

まばたきの詩人 水野源三さん

東北学院史資料センター 日野 哲

コリントの信徒への手紙二 第二二章九〜一〇節

9 すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。10 それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。

私は、この夏、北海道を一週間ほど旅行いたしました。訪れたのは、帯広、根室、別海、阿寒という主に道東方面でしたが、最後の阿寒に宿泊中、八月二十九日の早朝六時ごろに突然、あの

北朝鮮からのミサイル発射を知らせるJアラートが鳴って、飛び起きるといっておまけ付きでした。しかも、町の防災無線では、「ただ今、この上空をミサイルが通過した模様です」というアナウンスですから、よりびつくりという始末でした。

今回の旅行は、観光が目的というわけではなく、私もメンバーの一人である男声カルテットで、この北海道の道東にある小さな教会、伝道所、集会所を廻って、礼拝やコンサートで歌って応援するという目的で行ったものです。私たちは四人ともクリスチャン、しかも全員東北学院大学の卒業生というメンバーです。

今回、私たちが一番伝えたいメッセージとして、練習に時間をかけ、力を注いだものに「十字架の愛」という曲のシリーズがあります。これは、水野源三さんという方の詩を基にしたもので、私たちは、「水野源三…十字架の愛」という、彼の生涯をストーリーとして、詩の朗読と、その詩にメロディーをつけた八曲の歌とで綴る約三十分の「詩と賛美」のシリーズを構成して、各集会で演奏いたしました。

水野源三さんは、「まばたきの詩人」と言われた方で、小学校四年生の時に集団発生した赤痢のために脳性麻痺となり、手と足の自由と言葉とを奪われ、わずかに目と耳の機能だけが残されました。彼の作品に「目と耳」という次のような詩があります。

「脳性麻痺のために　すべてを奪われたが

神さまが　目と耳だけを守ってください

み言葉を読むために　み言葉を聴くために

み言葉によって救うために」

源三さんが十四歳の時に、この町の教会の牧師と出会ったことから、キリスト教の信仰を与えられ、感謝と喜びの詩を綴るようになったのです。詩を綴ると言っても、彼の場合は「あいいうえお」の五十音図を壁にかけ、お母さんが順に指を指していつて、彼が望む字まで来た時にまばたきで合図するという方法で一字一字書き取られたものです。

私が最初に彼の詩に出会ったのは、「苦しまなかったら」という曲で、その時にはある身障者が作詞したものである。次のような詩です。

「もしも私が苦しまなかったら　神様の愛を知らなかった

多くの人が苦しまなかったら　神様の愛は伝えられなかった

もしも主イエスが苦しまなかったら　神様の愛はあられなかった」

その時はどんな苦しい状況に置かれた人が作った詩なのかはわかりませんが、とても大きな衝撃を受けたのを覚えています。

でも、源三さんの人生に、感謝と喜びだけでなく、大きな苦難が訪れます。最も良き理解者で援助者であった最愛のお母さんが亡くなったのです。彼は「主よ、なぜ」と神様に問いかけます。

「主よ、なぜですか 父に続いて母までも み国へ召されたのですか

涙があふれて 主よ 主よと ただ呼ぶだけで 次の言葉が出てきません

主よ あなたも 私と一緒に 泣いてくださるのですか」

お母さんが亡くなり、詩を作るお手伝いをするのは、同居する弟の奥さんに代わりました。源三さんの感覚はさらに研ぎ澄まされ、音やにおいて感じたことを詩に綴るようになります。私は十年ほど前の夏に、源三さんの故郷、長野県の坂城町を一人で訪ねたことがあります。とても暑い日でしたが、地元の方に教えていただいたとおりにお墓に向かつて静かな町を歩いて行くと、道の途中に一つの詩碑を見つけました。そこには、源三さんと、その側に寄り添うように笑顔をたえたお母さんの二人の写真と共に、「今日一日も」という次のような詩が刻まれていました。

「新聞のにおいに朝を感じ 冷たい水のうまさに夏を感じ

風鈴の音の涼しさに夕暮れを感じ かえるの声はつきりして夜を感じ

今日一日も終わりぬ

一つのこと、一つのこと 神様の恵みと愛を感じて」

源三さんにとって、恵みどころか生きることそのものが苦しみであり、絶望であつたはずですが、しかし、彼の作つた詩にはそんな苦しみより、希望と喜び、そして感謝が満ち溢れているのです。そして、彼は「十字架の愛」という詩で、次のようにその信仰を表します。

「主イエスが歩まれた道は 昔も今も 誰も歩いたことがない

主イエスが歩まれた道は 私を誠の道へ導くため 歩まれた

十字架の道」

今年、水野源三さんが亡くなって三十三年、生まれてからちようど八十年になります。彼の詩集『我が恵み、汝に足れり』には、こうしてまばたきで作られたたくさんの詩が掲載されていますので、ぜひ一度手に取つてご覧いただきたいと思います。今日の聖書の箇所では、「我が恵み、汝に足れり」という文語体は「私の恵みは、あなたに十分である」となっており、続けて「力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と書かれています。

私たちの人生には、自分が望んだとおりになることよりも、そうでないことの方が多くあります。自分が望んだとおりにものが進んでいる時は、私たちに神様は不要な存在かもしれませぬ。でも、絶望した時、自分に限界を感じた時に、私たちは思わず「神様」と叫んでしまうのです。まさに、弱さの中で神様を認識し、神様の力が表されることを祈り求める瞬間です。

私たちの多くがそうであるように、他の人と比べて劣等感をもったり、優越感をもったりしながら人生を生きるとしたら、今ご紹介した水野源三さんのような方は絶望しかもつことができない存在だと思います。人と人という横の関係ではなく、神様と私という縦の関係、こんな自分に目をとめてくださる偉大なお方がおられることに気付く時、絶望は希望へと変えられるのだと思います。

それでは、お祈りをいたしましょう。

「神様、私たちをかけがえのない大切な存在とみなしてください。あなたの恵みに感謝いたします。今日一日も、あなたの恵みと愛を感じて過ごすことができますよう御導きください。この祈りを主イエス・キリストの御名を通して御前にお捧げいたします。アーメン」

編集後記

大学宗教授主任 阿久戸 義 愛

「大学礼拝説教集」第二二二号をお届け致します。東北学院大学では、年間の授業期間、毎日礼拝が守られています。この大学礼拝こそは、キリスト教精神に拠って立つべき東北学院の建学の精神がもつとも顕わにされる時と場所であると言えましょう。ここに収められている説教は、二〇一七年度に実際に語られた説教を文章化したものです。この説教集を通して、東北学院が常に守ってきた大学礼拝の雰囲気をお伝えすることができれば幸いです。

説教は、決して単なる原稿の朗読ではありません。説教者のたしかな声で語られ、その場集った会衆とともにつくられていく「一回的な出来事」である礼拝の説教は、仮に同じ内容であったとしても、常に新しく聞かれ、一人ひとりの心に呼びかけるものです。ここに記された説教も読者に呼びかけるものではありませんが、私たちの切なる願いと祈りは、大学礼拝の「場」にお越しいただき、ともに礼拝を守っていただくことです。

神学者カール・バルトは、説教について次のように述べています。聖書のテキストとは「証言

の過程」であり、また説教とはテキストが辿る「証言の過程」を、もう一度、会衆と共に歩むことです。それは換言すれば、「預言者と使徒たちが聞いたことを、語り直すことをわれわれは試みるべき」だということです。

「大切なことは、人間に対し、常に絶対的に未知の真理であるものを証しすることであり、またそのことに、このような貧しい証しの奉仕によってこの真理、イエス・キリストの真理そのものが語りだし、みずから知らせてくれるように、希望と祈りをもってあたることである。したがって、われわれが説教の意味として不断にくり返し念頭におかなければならないことは、聖書のテキストの背後に人間にとって絶対的に未知である真理が立っていることである。」（『神の言葉の神学の説教学』）

東北学院の大学礼拝での御言葉の取り次ぎは、牧師だけでなく信徒教員も行います。それは決して容易なことではありません。しかし、聖書のテキストにしっかりと向き合い、貧しい証しの奉仕へと向かおうとする私たちの真摯な取り組みは、御言葉を証しするすべての者が携わるべきものです。聖書が証しするものを、今日の状況の只中で、新たに取り次いでいく私たちの説教の「チャレンジ」を、祈りにおぼえていただければ幸いです。

大学礼拝説教集

第 二十二号

二〇一八年三月三十一日発行

発行責任者 宗教部長 野村 信

編集責任者 大学宗教主任 阿久戸義愛

出版 株式会社 アクトジャパン

問い合わせ先 東北学院大学 総務課

〒980-8511 仙台市青葉区土樋一の三の一

☎〇二二・二六四・六四二八

